上石田遺跡

甲府盆地低部の中期縄文遺跡
発掘調査報告書

甲府市教育委員会
1973・3

上石田遺跡

甲府盆地低部の中期縄文遺跡
発掘調査報告書

報告者
（日本考古学協会々員）
谷口一夫

序

近年，埋蔵文化財は，各種の大規模な開発事業によって，これまで知られていなかった高松塚古墳のような，学術上貴重な資料が発見され，全国的にその保護，保存上の問題が提起されております。

上石田遺跡は，昭和44年4月，甲府市南西地区土地区画整備事業で発見されました。その遺跡は約4000年から4500年前の縄文中期のきわめて価値あるものであり，甲府盆地における大古の人間生活を究明するためにも，継続して発掘し研究をする必要のあることが強くさけばれてきました。

このたび，日本考古学協会々員谷口一夫氏に発掘を依頼し，昭和47年7月，第2次の発掘調査を実施してまいりました。

上石田遺跡は，標高263mの平坦地に占地する場所であり，1メートルあまり掘り下げると湧水が多くいまでも低湿地帯の様相を強く残しております。この低湿地帯からの出土品は先住民族の姿を追求し甲府盆地の古代歴史を新らしく書きかえる貴重な資料として高く評価されるものと思います。

この土中に残された私たち祖先の足跡は，甲府盆地に定住した民族研究の資料として，藤村記念館考古資料室に展示し厳重に保管しておく所存でございます。

おわりに直接調査にあたられた，谷口先生はじめ調査員各位のご尽力に対しまして，厚くお礼を申し上げ序といたします。

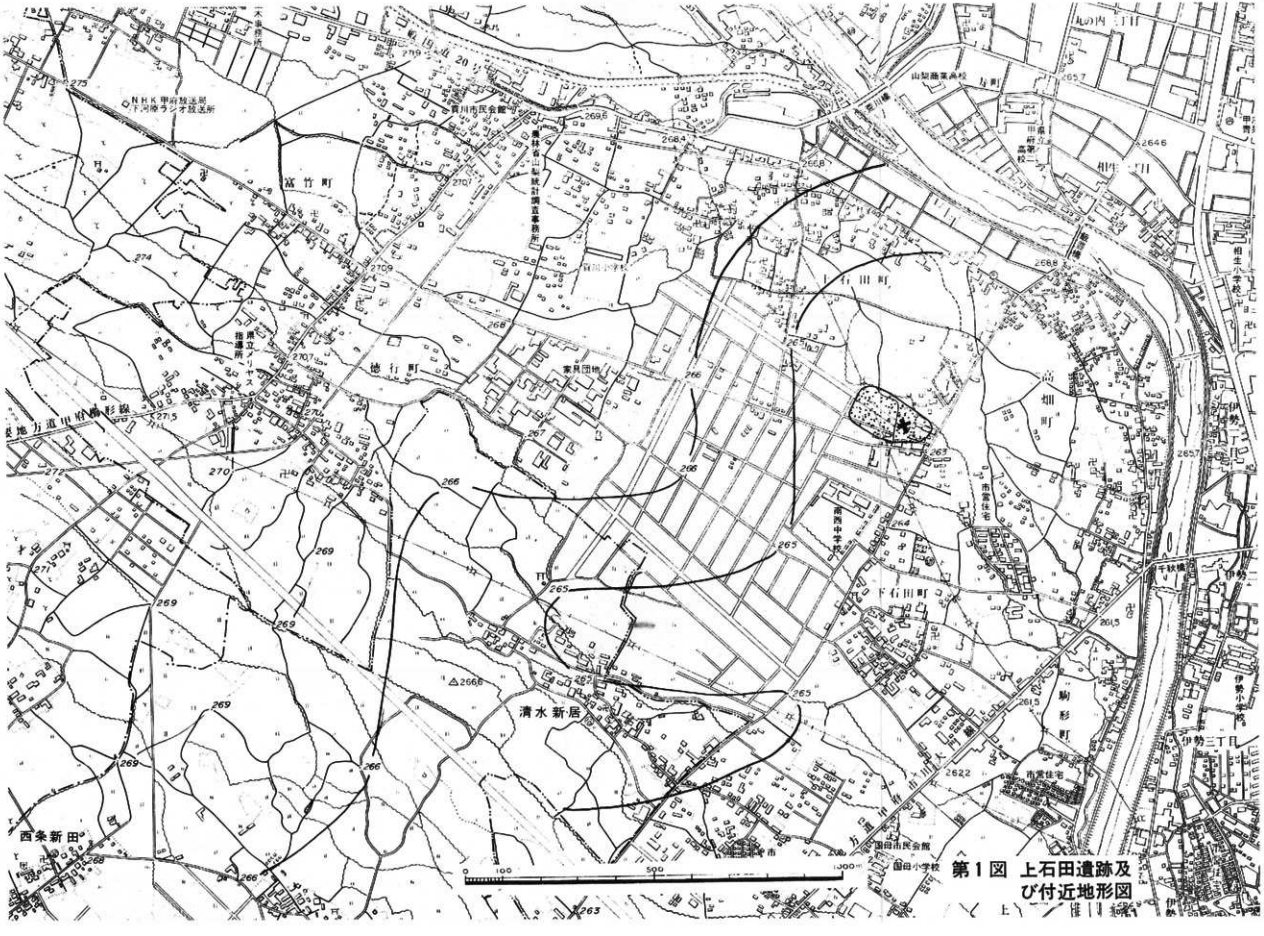
昭和48年3月31日

甲府市教育委員会教育長

岩　波　民　造

例　　言

1. 本書は甲府市上石田町字仲村地内高畑町富竹線街路改良工事に伴なう 埋蔵文化財発掘調査報告書である。
1. 甲府市教育委員会の指名で発掘担当者として日本考古学協会々員谷口一夫が当った。
1. 発掘調査は谷口一夫， 飯島進，小林広和が調査員として担当し，明治大学々生，都留文科大学々生を補助調査員に， 山梨考古学研究会々員を調査団員に，県立女子短期大学々生及び県立南高校県立甲府工業学生等の調査協力員の応援を求め行なったものである。
1. 遺物の整理， 土器復元，実測，拓本，その他図版作成，原稿執筆は発掘担当者谷口一夫がこれに当った。なお， 石器実測墨入れ，図版墨入れの作業について末木健君の協力を頂いた。
1. 調査に当っては甲府市教育委員会はじめ関係者各位の厚いご指導とご援助を得たいことを記し，あわせて深甚なる謝意を表する次第である。



第1図　上石田遺跡及び付近地形図

目　　次

第一章　概　　説 …… 1
第一節　発掘調査の動機と経過 …… 1
第二節　発掘調査実施上の問題点 …… 2
第三節　発掘調査団の構成 …… 3
第二章　位置と地形 …… 5
第一節　上石田遺跡の地理的環境 …… 5
第二節　上石田遺跡の層位と文化層 …… 6
第三章　上石田遺跡発掘調査報告 …… 11
第一節　上石田遺跡発掘の経過（発掘日誌から） …… 11
第二節　上石田遺跡出土遺構，遺物一覧表 …… 18
第三節　上石田遺跡出土の遺構 …… 19
第四節　上石田遺跡出土の土器 …… 29
第五節　上石田遺跡出土の土製品 …… 49
第六節　上石田遺跡出土の石器 …… 49
第七節　上石田遺跡出土とその他の遺物 …… 54
第四章　ま　と　め …… 55
第一節　上石田遺跡に於ける成果 …… 55
第二節　今後の問題点と課題 …… 55

挿 図 目 次

第1図　上石田遺跡付近地形図 …… 巻頭
第2図　昭和44年4月に発見された石囲い炉址 …… 1
第3図　上石田遺跡発掘グリット図並びに遺構平面図 …… 7
第4図　上石田遺跡東西セクション実測図 …… 9
第5図　甲府盆地内の自噴井の分布と上石田遺跡位置図 …… 11
第6図　発掘前の現場と作業開始の模様 …… 13
第7図　発掘途上に於けるアクシデント …… 16
第8図　第一号住居址第一次生活面の炉址 …… 20
第9図　第一号住居址第二次生活面に於ける土器，石器分布状況 …… 21
第10図　第一号住居址第一次生活面に於ける石囲い炉と土器，石器の分布状況 …… 23
第11図　第二号住居址に於ける土器，石器分布状況 …… 25
第12図　石囲い土拡墓と土器分布状況 …… 27
第13図　第一号住居址第二次生活面出土土器実測図 …… 33
第14図　土器拓影1（第一号住居址第一次生活面出土土器）…… 35
第15図　土器拓影2（第二号住居址第二次生活面出土土器）…… 35
第16図　土器拓影3（　〃　）…… 36
第17図　土器拓影4（　〃　）…… 37
第18図　土器拓影5（　〃　）…… 38
第19図　土器拓影6（　〃　）…… 39
第20図　土器拓影7（　〃　）…… 40
第21図　土器拓影8（　〃　）…… 41
第22図　土器拓影9（　〃　）…… 42
第23図　土器拓影10（　〃　）…… 43
第24図　土器拓影11（第二号住居址出土土器）…… 44
第25図　土器拓影12（　〃　）…… 45
第26図　第一号住居址第一次生活面出土土偶実測図 …… 46
第27図　石囲い土拡墓出土，土器及び周辺地域出土土器実測図 …… 47
第28図　第一号住居址第二次生活面出土石ヒ実測図 …… 50
第29図　第一号住居址第二次生活面出土石斧実測図 …… 51
第30図　第二号住居址出土石斧実測図 …… 52
第31図　石鏃実測図 …… 54
第32図　第一号住居址第二次生活面出土の骨粉 …… 54

図 版 目 次

第1図版　上石田遺跡遠景 ……巻末
上石田遺跡付近を流れる荒川の現況
第2 〃　上石田遺跡東西トレンチ断面……〃
東西トレンチに深く喰い込んだ攪乱層
第3 〃　第1号住居址（第二次生活面）の土器出土状況……〃
同上遠景，ほぼ円形に分布がみられる
第4 〃　第1号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況……〃
同　上
第5 〃　第1号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況……〃
同　上
第6 〃　第1号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況……〃
第1号住居址（第二次生活面）に於ける土器，石器（石ヒ）出土状況
第7 〃　第1号住居址（第二次生活面）に於ける石器，（石ヒ）出土状況……〃
第1号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況
第8 〃　第1号住居址（第二次生活面）に於ける土偶出土状況……〃
同　上
第9 〃　第1号住居址（第一次生活面）に於ける石囲い炉址の出土状況……〃
中央ベルト表面が第二次生活面
第1号住居址（第一次生活面）に於ける土器出土状況
第10 〃　第1号住居址（第一次生活面）に於ける石囲い炉……〃
同上，中央からは焼石，手前，右には石棒が利用されている
第11 〃　第1号住居址（第二次生活面）に於ける埋甕炉……〃
同上，下部は第一次生活面に切り込んでいる。
第12 〃　第2号住居址に於ける土器出土状況……〃
同　上
第13 〃　第二号住居址に於ける土器出土状況……〃
同　上
第14 〃　石囲い土拡墓……〃
同　上
第15 〃　石囲い土拡墓と層位関係……〃
石囲い土拡墓と周辺土器出土状況
第16 〃　石囲い土拡墓土器埋設状況……〃
同　上
第17 〃　石囲い土拡墓，土器埋設状況……〃
同　上
第18 〃　石囲い土拡墓，土器撤去後の状況……〃
同　右

第19 〃　第1号住居址（第一次生活面）出土の土製円盤（表）……〃
同　上（裏）
第20 〃　第1号住居址（第二次生活面）出土の土偶（表）……〃
同　上（裏）
第21 〃　第1号住居址（第二次生活面）出土の土偶破片（足，手）……〃
同　上（裏）
第22 〃　第1号住居址（第二次生活面）出土の石匕……〃
第1号住居址（第一次生活面）出土の磨石
第23 〃　第2号住居址出土の磨石……〃
第1号住居址（第二次生活面）出土の磨石
第24 〃　第1号住居址（第二次生活面）出土の凹石……〃
第1号住居址（第二次生活面）出土の多孔石
第25 〃　第2号住居址出土の凹石……〃
その他グリット出土の凹石
第26 〃　第1号住居址（第二次生活面）出土の石斧（表）……〃
同　上（裏）
第27 〃　第2号住居址出土の石斧（表）……〃
同　上（裏）
第28 〃　第1号住居址（第二次生活面）〈上段〉，第2号住居址出土の玉石……〃
第1号住居址（第二次生活面）出土の敲石
第29 〃　第1号住居址出土の敲石……〃
その他グリット出土の敲石
第30 〃　第1号住居址（第二次生活面）出土のメノー剝片＜上段左2ッ＞とその他
グリット出土の石鏃及び黒曜石剝片……〃
第1号住居址（第二次生活面）出土の黒曜石剝片＜上段左＞と第2号住居址
出土の黒曜石剝片

第一章　概　　説

第一節　発掘調査の動機と経過

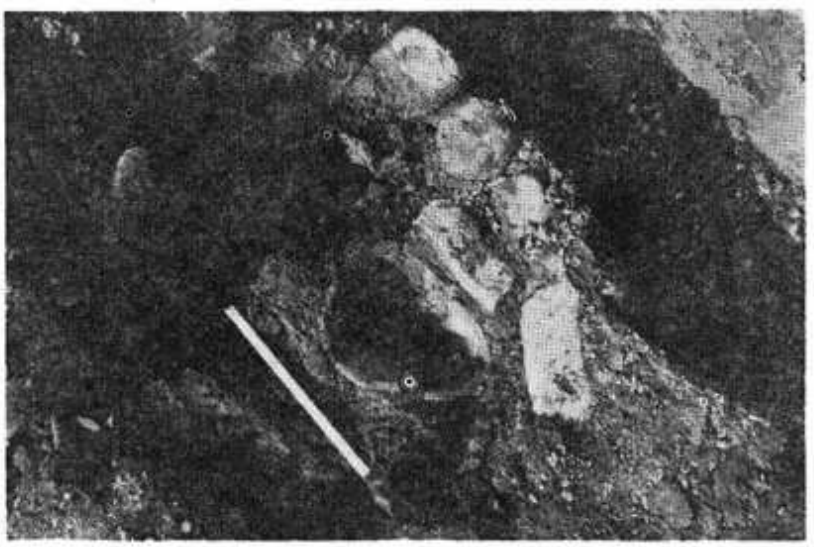
山梨県甲府市上石田町仲村地内に占地する上石田縄文遺跡は，昭和44年4月9日甲府市が行なった南西地区土地区画整理事業に伴なう土木工事で発見された。勿論，昭和38年に実施された山梨県下遺跡分布調査台帳にも当該遺跡は認められていないので，この時が土木工事に伴なう事実上の新発見である。

この上石田遺跡は発見当時，新聞に大きく報道されたため，周辺地域の学童が中心に群がり，その遺物の大半は消失した。

たまたま相前後して石囲い炉址が発見されたことから，日本考古学協会々員である山本寿々雄，谷口一夫が現地に急行，緊急調査を行ない取るべき処置を講じたのである。

後，昭和45年3月27日～4月8日にかけて小規模ではあるが山梨県教育委員会の指名で谷口一夫，上川名昭を発掘担当者として，周辺地域の一画を16㎡ほど発掘調査をするに至ったが，調査途上の4月5日発掘調査現場を破壊され，出土遺物は持去られ，しかるべく成果が収められなかったことは誠に遺憾なことであった。

爾来，当該遺跡はそのまま具体的な調査が行なわれないまま今日を迎えたが，南西地区土地区画整理事業の再開から再び破壊の危険にさらされたわけである。特にこの区画整理事業が昭和46年度完成を目指し進めてこられたため，現実には大巾な工事の遅延にもなっていたが，ブルドーザーによる掘さく工事で大量の土器片の出土をみたことから，甲府市教育委員会の要請で工事を一時ストップし，



第2図　昭和44年4月に発見された石囲い炉址

工事担当部，課，その他関係者の協力によって調査費用の計上と7月1日～7月20日までの20日間の調査実施期間を得て今回の発掘調査が事実上可能となったわけである。

発掘調査の実施に当っては，甲府市教育委員会から日本考古学協会々員谷口一夫が指名され，河口

親賀甲府市長と谷口との間で調査実施に係る委託契約を締結し，谷口らを中心に上石田遺跡発掘調査団が編成され，予定期間内に全ての調査を完了した。

なお，調査開始から最後まで，この発掘調査による貴重な文化財の記録保存の作業の為に絶大なる協力を下された甲府市教育委員会和田吉弥委員長，岩波民造教育長，社会教育担当笠原稔主幹，山本保主査，及担当者の山村友義氏はじめ，都市計画担当赤池昭之主幹，栗原昭明主査，担当宮川雅典氏及び建設会社加賀美建設KK加賀美章社長及び発掘現場に於て若尾商店並びに伊藤家の協力，さらには山梨県議長田猪太郎氏の好意に深甚なる謝意を申し上げる次第である。

また，7月の炎天下にあって，かつ現場は泥沼と化した現場で最後まで調査の完遂に努力して下された調査員，補助調査員，調査団員，調査協力員に改めて謝意を申し上げる次第である。

第二節　発掘調査実施上の問題点

上石田遺跡は甲府盆地の底部，標高263mの平坦地に占地する。その遺物分布範囲は過去の遺物発見の事実から相当広範囲に及ぶが，その密集地域は第1図に示した通りである。

上石田遺跡はその出土遺物からして容易に縄文時代中期の遺跡であることが，判明するが，甲府盆地底部に於ける縄文時代初の本格的な遺跡であるだけに甲府盆地に足跡を残した中期縄文時代人の生活内容を知る上で特に重要な要素が含まれている。当然のことながらこの上石田縄文遺跡を解明することにより，先住民族の赤裸々な姿の一端が明らかになろう。

上石田遺跡が占地する現場は，現地表面からわずか1m余り掘り下げると湧水が多く，低湿地帯の様相を強くしている。最近でも少し雨が降り続くと水に浸る地域にあって，縄文時代にあってはなおさらのこと，すぐ東を北から南に流れる荒川が流れ放題であったことから，完全に荒川の氾濫原上に位置していたことは事実であり，しかるにこの地に定住の場を求めた縄文時代の先住民族の真の姿を追求することによって，甲府盆地の古代史に新たなる一頁を記述することを可能にした。

上石田遺跡から発見されるところの中期縄文式土器の一群は詳細は後述するが，中部高地一帯に極めて豪華に繁栄したところの土器群と同一であり，同じ遺物をもつ遺跡が，例えば甲府市内では昇仙峡上の高町遺跡（標高900m），韮崎市の坂井遺跡（標高460m），塩山市の重郎原，柳田遺跡（標高500～600m），御坂町の桂野遺跡（標高600m）など多くの遺跡は全て山岳地帯もしくは丘陵上に占地するのに比し，甲府盆地の底部にあって，かつ低湿地帯という特異な立地性に問題がある。

当時の生活を支える重要な経済は食料採集が原則であった。特に海岸地帯に面した漁撈民族に対比し，中部高地には狩猟民族が生活を営んでいたわけだが，そうした中部高地の住民が盆地の底部にまで下りて来て生活をした背景こそ重要である。

既に以前の調査で炉址の存在が確認されているところから，単なる行動範囲内に含まれたという遺跡と違い，上石田遺跡は完全に定住した民族がいた事は明らかであるが，その最大の条件はやはり食料が介在したことは間違いないだろう。

第三節　発掘調査団の構成

発掘担当者 主任調査員	谷口一夫	日本考古学協会々員 山梨県遺跡調査団常任幹事
調査員	飯島進	山梨県遺跡調査団常任幹事
〃	小林広和	立正大学大学院学生 山梨県遺跡調査団幹事
補助調査員	倉賀野あつ子	明治大学文学部学生
〃	山本正則	都留文科大学学生
〃	竹内清志	〃
〃	里村晃一	〃
調査団員	分部桃彦	山梨考古学研究会々員 山梨県遺跡調査団幹事
〃	渡辺八郎	〃
〃	川崎昌宏	〃
〃	中村泰	山梨考古学研究会々員
〃	小野総一郎	〃
〃	松村正之	〃
〃	山崎金夫	〃
〃	東条博道	〃
調査団員	興水文博	〃
〃	鈴木馨子	〃
〃	中根佐吉	〃
〃	中根静枝	〃
〃	長田耕一	〃
調査協力員	高野敬子	県立巨摩高OB
〃	飛田野静子	県立女子短大学生
〃	向井幸子	〃
〃	横田貞子	〃
〃	浅原政子	〃
〃	遠藤ますみ	〃
〃	高野ひとみ	〃
〃	伊井範子	〃
〃	芹沢範子	〃
〃	田中淳子	〃
〃	土屋篤子	〃
〃	佐々木信子	〃
〃	川越とし子	〃

調査協力員	角田　清子	県立女子短大学生
〃	角田　こずえ	〃
〃	内藤　雅子	〃
〃	中沢　えり	〃
〃	佐野　利江	〃
〃	鈴木　節子	〃
〃	伊藤　綾子	〃
〃	雨宮　千尋	〃
〃	深沢　真知子	〃
〃	河合　育子	〃
〃	乙黒　正彦	県立甲府工業学生
〃	長沼　睦雄	県立南高学生
〃	今村　健	〃

第二章　位置と地形

第一節　上石田遺跡の地理的環境

上石田遺跡（甲府市上石田町字仲村）は，外周囲を断層崖によって境された甲府盆地の底部に堆積された盆地床上に占地する。丁度その地点は甲府市街地西部を北から南へ流れる荒川が約90度近く逆〃く〃の字型にカーブした外側，いわゆる甲府市街地からは荒川をはさんで外側に位置した荒川扇状地上に当る。この荒川は長い幾月のうちに砂礫を運搬堆積したために，河床が265.7mと上石田遺跡263mからみると天井川を形成している。甲府盆地の最低位は250m，平均高度は285mであるから，この上石田遺跡の位置する地点は甲府盆地でもかなり低位置に属することになる。また，この上石田遺跡付近では，平素少々雨が降り続くとすぐに浸水するほどの地域であるが，何故にこの地に中期縄文人が居住地を求めたかは非常に重要なことといえる。

また，上石田遺跡が占地する上石田～昭和村県道沿線には数カ所の沼(かつ)かっては存在したところでもあり，かつ，この沿線では最も低い位置に位置している。

では目を上石田遺跡西方に転じてみると，家具団地から南西中学校にかけた，ほぼ南南東に低い丘陵が確認できる。いずれこの地域は現状では区画整理事業で平坦地となっているが，かってはもっと明確な丘陵が認められたとも思われる。おそらくその丘陵の一部に上石田遺跡は占地していたと想定できる。

発掘調査の結果，詳細は各々の章にて記述するが，現地表下約1m下から中期縄文人の定住を裏づける住居址や土拡墓の発見があったが，果して当時このような湿地帯であったならこの様なタイプの住居では生活は完全に不可能であったと思われる。しかるにこの地域に於て中期縄文時代から今日までの約4000年～4500年の間に環境の変化があったことになるが，それを想定するならば(1)地下水のレベルが上昇した。(2)かってあった丘陵が比較的広範囲に亘って沈下した。などを上げることが出来る。この場合(1)の根拠の方が強いようにも感じられるが，(2)の場合は荒川が何是この低い部分に於て大きく90度あまりもカーブをしなければならなかった点である。ここには当然何等かの障害物があったと考えられるゆえんである。

第 二 節　　上石田遺跡の層位と文化層

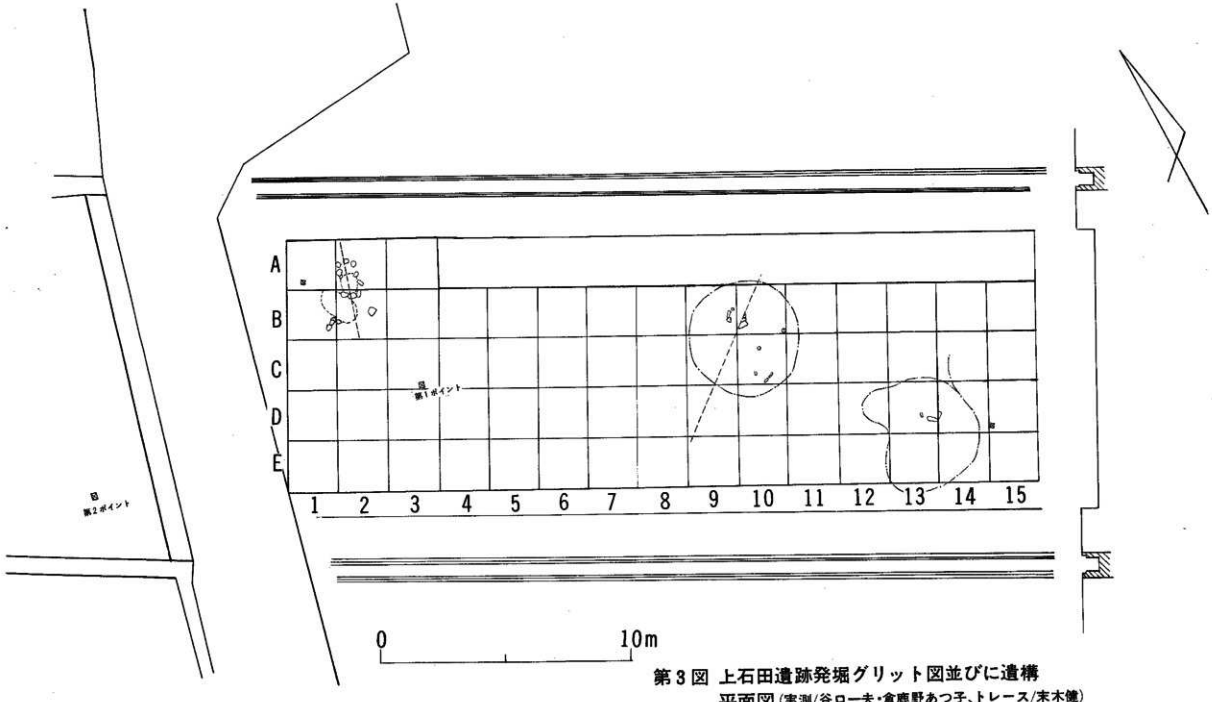
上石田遺跡に於ける層位の確認は第３図で示した発掘グリット図Ａ１区，Ａ２区，Ａ３区の北壁を延長して実施した。もともと発掘現場はカースクラップ・センターのプレス台が埋設された位置であったため全域に亘ってコンクリートの層があった。この為，現地表面より約60㎝は攪乱層の状況であった。また，発掘現場は現地表面から歩道部分を除き70㎝ほどブルドーザーによる除土工事が行なわれていたため第５層ないし文化層の第６層にまで及んでいた。もっともここで文化層にまで達したをため遺物の発見があり，工事を中断し発掘調査への経過をみたわけであるから，かならずしもブルドーザーによる除土工事も無駄ではなかった。もっとも逆にブルドーザーが入る以前に調査実施ということであったら，第２層の15㎝に及ぶコンクリート層があったので，調査には大きな障害となったわけでもある。いずれにせよ文化層の上層にまでブルドーザーの爪がかかったとはいえ，良好な文化層も部分的に認められたわけで，この様な悪条件の割合には比較的良好な資料を得たと思う。

さてＡ１区～Ａ３区北壁は，歩道の路肩に当り，第一層（表土）から層位を確認することが出来たが，その状況は第４図に示した通りである。

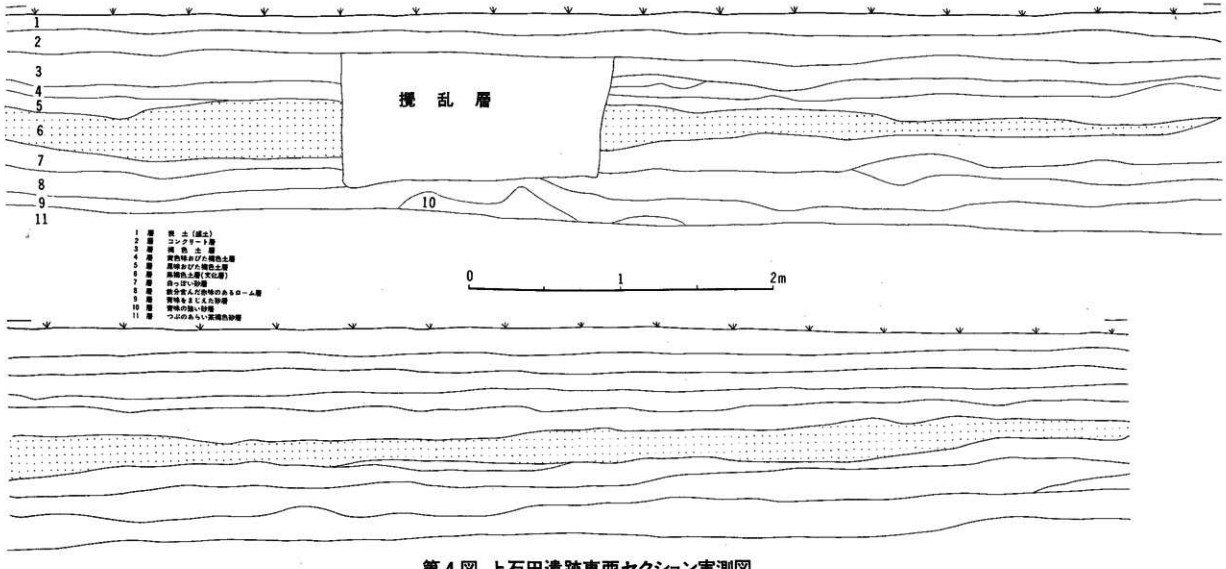
層位確認のため現地表面から１ｍ50㎝堀り下げたが，１ｍで湧水があり，地上面に乗るとぶよぶよし，あたかもコンニャクの上にでもいるようである。70㎝堀り下げるのにブルドーザーが良く入れたと思うほどである。また，この為，遺物がかなり押し込まれたことも事実であろう。

図示したように層位は11層に及んだ。第１層は第２層のコンクリート層の上に盛られた層で当然攪乱層である。その攪乱層は第３層の褐色土層にまで及んでいた。第４層は黄色味をおびた褐色土層でここまではブルドーザーで完全に除土されていた。遺物は全く認められない。その下に部分的に第５層の黒味をおびた黄褐色土層があり，第６層の分厚い黒褐色土層につながる。上石田遺跡に於ける文化層は，この第６層一層にのみ認められた。文化層の第６層の下は，第７層の白っぽい砂層，第８層は鉄分を含んだ赤味あるローム層，第９層は青味をまじえた砂層，この第９層の下層にところどころ特に青味の強い第10層の砂層が認められ，その下に第11層のつぶのあらい茶褐色の砂層があった。第６層の文化層以下は第８層にローム層をはさみ全て砂層であり，かっての荒川の氾濫原を思はしめるが，いずれの層に於てもごつごつした河原石は全く認められない。これなど調査途上に於ても不思議に感じていた事柄である。現在の水位は第６層にまで及んでおり，発掘調査中湧水でなやまされた。現場は梅雨期でもあったため雨水もたまったが，そのため泥沼と化し発掘作業はかなりの困難をきわめた。

第１号住居址，第２号住居址の炉石さらに石囲い土拡墓はいずれも第６層の最下層，第７層の上層に切り込んで埋没してあったことから上石田中期縄文人の生活は第７層の白っぽい砂層面から生活が開始されたと理解してよい。おそらく，彼等がこの地へやって来た時には，荒川の澄み切った冷たい水が白い砂浜に広がり，ところどころに葦が生い繁り，その間を川魚が泳ぎ，小鳥が舞うといったのどかな光景が目に浮ぶ。その砂浜の少し小高いところへ住居を構え生活が始まったと考えられる。それ等の小動物が彼等の格好の食糧になったわけであろう。



第3図 上石田遺跡発掘グリット図並びに遺構
平面図（実測/谷口一夫・倉鹿野あつ子、トレース/末木健）



第４図 上石田遺跡東西セクション実測図

第三章　上石田遺跡発掘調査報告

第一節　上石田遺跡発掘の経過

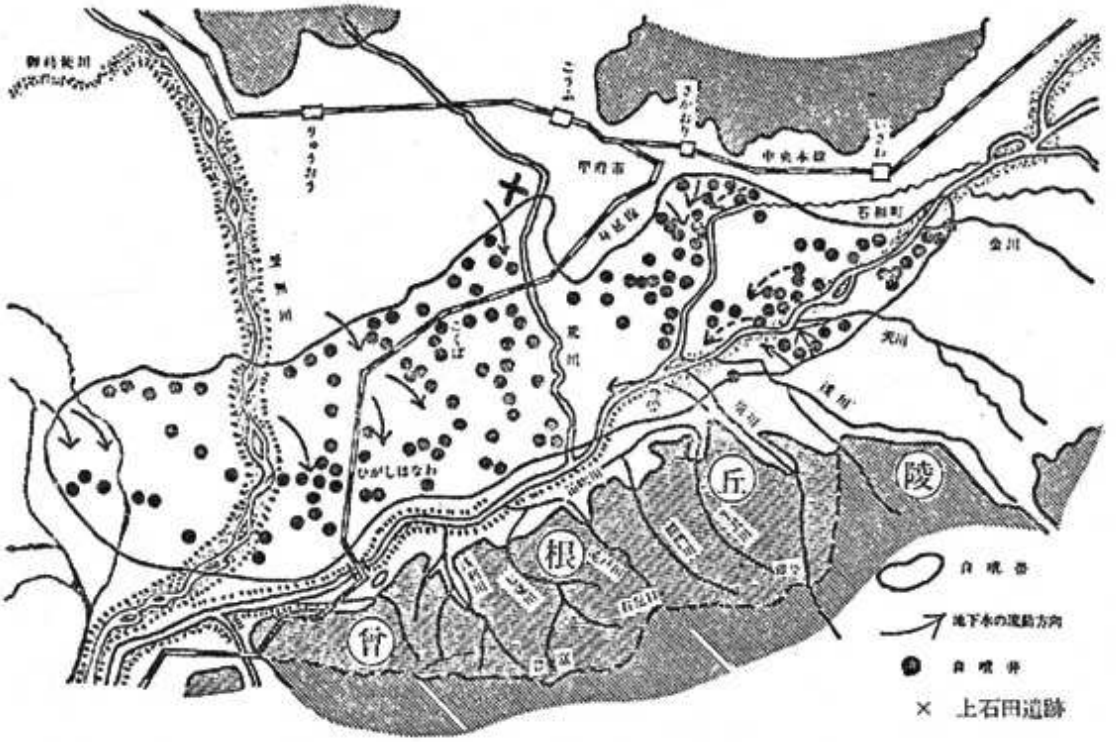
上石田遺跡発掘調査は昭和47年７月１日(土)から７月18日(水)までの18日間に亘って実施した。発掘日誌に基づく発掘経過は次の通りである。

昭和47年７月１日（土）曇のち晴，むし暑い発掘調査の準備に着手。資材を調達，同時に現場へ運搬，現場に近い伊藤家の好意で物置を借用し搬入，明日からの作業に備える。さらに，動員体制の確立のため関係者への連絡を済す。どうにか急の発掘作業だったが約20日間に亘るメドが立つ。

現場は昨日来の雨の為，半分は水没，半分は泥沼と化し，ほんの一部分に乾燥した地面がみられる程度，低湿地帯の発掘調査だけに期待も大きいが作業の先行き困難を思はせるものがあった。

とにかく明日の鍬入れ式後の発掘調査開始に備え，グリットの設定に入る。発掘グリットは現場の状況をかんがみ２m四方のグリットを設定，その杭打ちと懸縄張りの作業を進めた。各グリットは各々Ａ１区，Ａ２区，Ａ３区，Ｂ１区，Ｂ２区…の呼称を用いることに統一し全部で64区画を設定した。結局，この作業で終日ついやした。

昭和47年７月２日（日）晴，朝から暑い。午前９時に現地へ集合，９時30分から甲府市教育委員会岩波民造教育長，同山本保主査，同山村友義主事，地元上石田町自治会長，谷口，飯島調査員及び補助調査員，調査団員が列席し，発掘現場にて鍬入れ式を挙行する。式終了後直ちに発掘作業に着手。



第５図　甲府盆地内の自噴井の分布と上石田遺跡位置図
（原図は山梨県地質誌<昭和45年>から引用）

まず，水没地域の水を堤防をつくり発掘区域の東側方の地域へ汲み出す作業と同時に，各グリット単位に散布している遺物の表面採集を行なう。一通り表面採集を終了した段階でC１区，C３区，C５区，C７区，C９区，C11区，C13区及びD２区，D４区，D６区，D８区，D９区を—10cmまで掘下げる作業を開始する。既にブルドーザーの除土作業で遺物包含層に現地表面が達しているためスコップによる掘り下げはやめ，移植ゴテ，竹へらによる作業から入る。この為，発掘作業は能率は上がらないが，遺物は次に記す状況で確認され始めた。

C１区からは武蔵野平野から伊豆方面，さらに甲信の中部高地に顕著な広い分布をもつ縄文時代中期後半の粘土紐を張り付けたところの加曾利E式土器破片。C３区は午後３時頃までに約半分を掘り進めるも土器片は細かく，豊富な遺物の存在が認められない。特にC３区は他区と異なり砂質層でやわらかく，かなり攪乱の様子が伺える。C５区では—10cm—15cmまで掘下げる，グリット東半分に土器片が多いが，いずれも縄文時代中期後半の土器で破片は概して小型。C７区では全体に—10cmまで掘込むも砂質層で遺物量は少ない。したがって—30cmまでスコップで掘下げてもC３区と同様攪乱の様相が強い。C９区では—10cmの掘下げで大型土器片が確認される。一応土器は取り上げずに分布，埋蔵状況を記録するため，—10mのレベルで追うことにする。C11区では凹石をはじめ，小型だが縄文中期後半の土器片が比較的点数多く採集される。C13区では縄文中期後半の大型土器の把手及び底部等が確認される。

D２区では土器片は僅少，河原石数個を確認。D４区では縄文中期後半の小型土器片若干に黒曜石製の石鏃一個，メノー剝片一個を採集。D６区ではグリック南部から比較的集中的に縄文中期後半の土器片が確認された。しかし，同グリットでも北西部分では—50cm掘り下げても砂質層で遺物の確認は得られなかった。D８区ではバルブのある黒曜石剝片及び石刃状剝片を採集，縄文中期後半の土器片も確認される。D９区ではC９区からの大型土器片を追うため掘下げ作業を進める。その結果，同一レベルより（—10cm）半分に割られた敲石，浅鉢？，破片，大型の口辺部破片等が認められる。以上12区の発掘作業を進めたが，いずれも出土遺物は縄文中期後半の土器が認められた。またC９区を中心とした付近に良好な遺物包含層，同じくC11区を中心に良好な遺物包含層があるように思われる。一応明日以降の作業の目安をこの地区に置くことにした。

昭和47年７月３日（月）晴，暑い

C９区を中心に昨日発見の土器レベルを追う。終日ここに主力を置き発掘作業を進める。同一レベルを追うことにより，かなりの遺物が認められる。いずれも土器等を取り上げずにそのレベルで追ってみた。

昭和47年７月４日（火）晴のち曇（午前11時頃より降ったりやんだり）

昨日に続きC９区を中心に追う。C10区，C11区，B10区，B11区をほぼ全域に亘り－10cm掘下げる。ほぼ円形に土器が分布していることが認められる。明らかに生活面であると認められる。しかしこのレベルでは炉址が認められない。

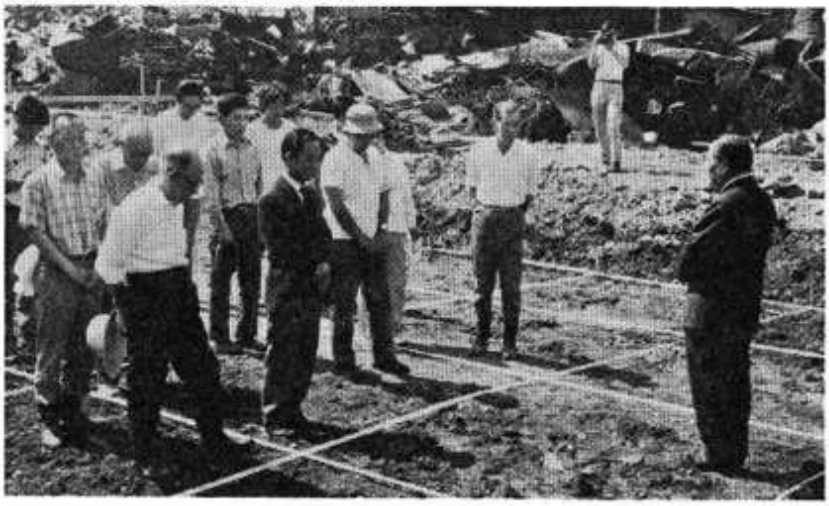
また，発掘グリット図作成の為，平板測量を行なうも時折り強くふりそそぐ雨で難行。だが作業は雨中の中を続行した。

なお，甲府市教育委員会山村友義主事がテントの手配をし現場に設営した。

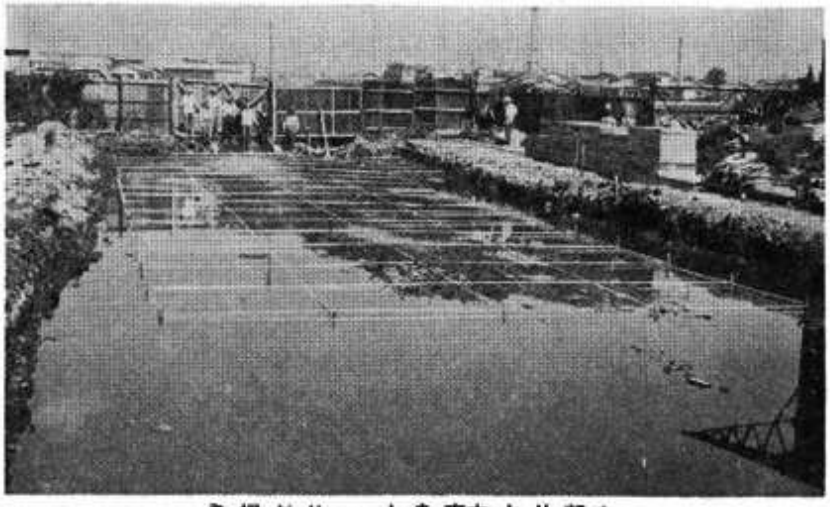
昭和47年７月５日（水）晴，むし暑い

C９区を発端に拡張した同一レベル上に，ほぼ円形に分布した土器群は，その組合わせからして第

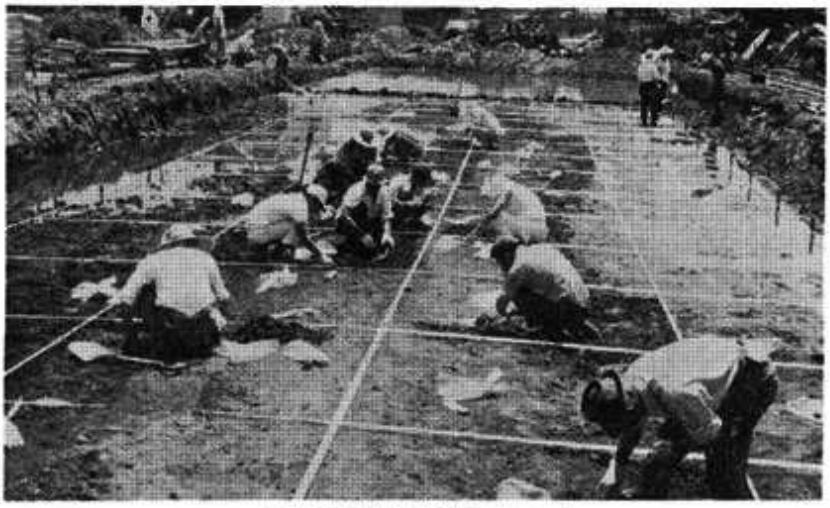
第6図　発堀前の現場と作業開始の模様



鍬入れ式で挨拶する岩波民造教育長



発堀グリット を南方より望む



発堀調査が開始された

一号住居址として扱うことにし，同一レベルで清掃し，出土状況の写真撮影，及び微細図取りの作業に入る。

同時に発掘作業の主力はC11区を中心とした区域に移し，大型土器片をそのまま残し同一レベルで追うことにした。その結果D13区にて炉址と思われる石囲いを発見したため，生活面としてとらえそのまま追ったが，かなり追い安くなった。この為，D14区，E13区，E14区を広げる。特にE13区からは土器が折重なったような状況で発見されたためF13区，F14区を拡張区として新設，同一レベルで追った。ここでもほぼ炉址を含め遺物の散布状況は円形を呈している。低湿地で泥沼と化した現場では竪穴住居址としての壁の立ち上りは全く確認できないが，第二号住居址をしてその存在は確実に認められる。当然，出土遺物は記録保存の為そのまま残し作業を進める。

昭和47年7月6日（木）雨

台風6，7，8，9号の4つが日本に接近ということから，時折り強く降る雨の為，作業は中断せざるを得なかった。ふびんでも作業を終了し，翌朝現場に来ると涌水が多く，住居址等は水没状況になるが，この雨量ではかなりの浸水になろう。一応，調査員を中心に現場にて状況視察の後，後日の作業の打合わせ及び屋内にて遺物整理の作業を行なう。

昭和47年7月7日（金）曇のち晴，時折り小雨がばらつく。

一昨日取材に来た地元紙に発掘記事がのる。昭和45年3～4月調査の折に新聞記事になったばかりに現場をあらされた苦い経験があるため考慮を要請したが，果していつもより一般の見学者が増し，遺跡保安上の点で心配が増す。遺物は記録の為，全て生活面に残してあるため，早く記録し採集することがせまられて来た。

作業は第一号，第二号住居址に集中し，特に写真撮影，微細図，グリット図作成に力を注ぐ。それ等の作業を終えた第一号住居址より遺物の採集に入る。同時に不安定ながら竪穴の落込らしき様相の部分が確認されたため，その部分を落して行く。この作業で第一号址にて懸案の炉址らしき遺構を発見したが円形状に分布していた生活面より，そのレベルは15～20㎝下であった。

さらに，第一号住居址土器採集中，東側部分に東を向いて埋設された土偶を発見した。この土偶も他の多くの土偶と同様に手足を欠いているが，調査による発見例が少ないだけに，明確なデータと共に得られたこの土偶は今後かなり貴重な資料となろう。

なお，第一号住居址の土器は石器と共に良好なセットとして把握される為，甲府盆地底部に生活した当時の生活様式を知る上で貴重である。また，この第一号住居址床面からは骨粉が随所で認められたが，あるいは人骨かとも思われる。この点は採集資料の正式な鑑定も必要だが，逆に言えば鑑定可能な個体での骨の採集が不可能であった。

また，第二号住居址については，早くから確認された炉址らしき遺構が炉址と断定するに足りる状況となり，一面に散布した土器面をそのまま残し，プランを追う作業を進めた。一部に壁らしい落込みを発見したが，それを追う作業は明日に残した。

昭和47年7月8日（土）晴，暑い

第一号，第二号住居址に重点を置き，それぞれ昨日の作業の継続をする。特にこれまでもそうであるが，一夜置くと現場はかなりの涌水があり，その排水作業から始めなければならなかった。

第一号住居址は床面への堀込み，第二号住居址は炉址のレベルで各グリットへ拡張を続ける。第二号住居址は特にD13区，D14区の間に炉址がありE13区からF13区（拡張区）にかけて土器が濃密な

分布をしている。 それ等土器はいずれも破片で，この間ではあたかも投げ捨てられたかの埋蔵状況を呈している。 なお，土器破片の合間にはところどころに凹石，石斧などの石器類も散見される。また昨日発見の第二号住居址の壁は追うにつけ逆方向にカーブし 直接関係がないことが明らかになった。

昭和47年７月９日（日）雨，降ったりやんだり

日曜日で労力も豊富だった為， 雨天でも作業を強行した。幸い時折強く降るとすぐ小雨になるということから小雨をねらって作業を展開した。

まず， 遺跡周辺の地形図の測量，グリット図の測量を行ない第一号住居址の概略のプラン及び第二号住居址の炉址及び土器分布範囲のプランを平板測量で記録した。

また，第一号住居址の中央ベルトの壁を残し床面までの掘込み作業を行なう他， 未発掘グリットであるＢ６区， Ｅ５区，Ｅ６区，Ｅ７区，Ｅ９区，Ａ１区及び飛地のＣ18区を掘下げる。

午後２時頃からは本格的な降りになったがその間テント内部のＤ２区を掘下げる。 さらに調査団員の男子高校生が雨中飛び出しＡ１区からＡ３区の北壁を延長した東西セクション取りの為， 壁出し作業に取りかかった。

また，夕刻の小雨及び晴れ間をねらってＡ１区， Ａ２区，Ｂ１区，Ｂ２区の掘下げ—10cmまでにかかったが，Ａ２区，Ｂ２区にまたがり， 石組みの遺構を発見した。発見した段階で日没にかかった為作業を終了， この遺構の確認を明日に伸ばした。

昭和47年７月10日（月）雨，豪雨

朝からの豪雨の為，現場での発掘作業は中止，室内での遺物整理に切り替えた。 遺物を水洗いしながら確認できる範囲では縄文中期の単純遺跡と思われる。

昭和47年７月11日（火）雨，豪雨

昨日来の豪雨で発掘現場の全域が水没，雨中排水作業の処置を行なう。 午後は甲府市教育委員会の山村氏の計いで動力ポンプによる排水作業を行なう。

昭和47年７月12日（水）雨，降ったりやんだり

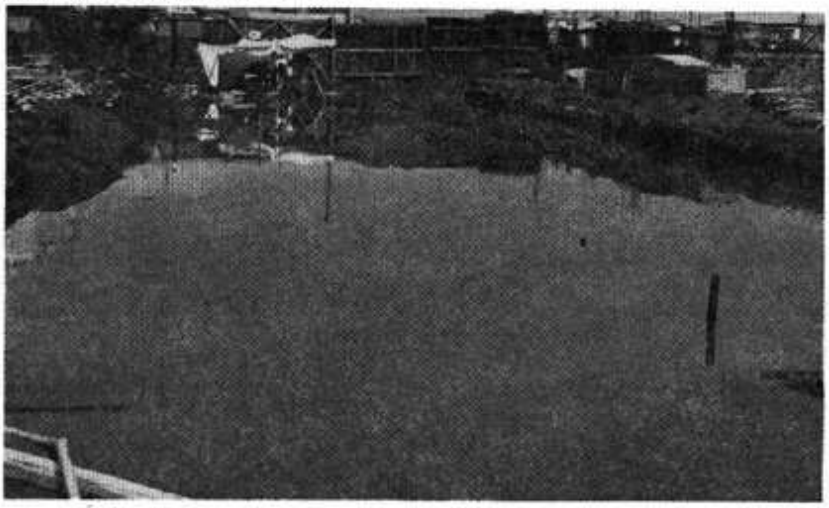
９時頃まだ雨が降りそうだったが， ２日間の遅れをとりもどすべく排水作業から取りかかる。９時15分頃から強い雨と変る。天気予報では県下に洪水大雨注意報が出る。 排水作業は降り続く雨で難行しかし，排水しなければ全く作業は不可能なため半日にて作業を中止した。

昭和47年７月13日（木）雨のち曇

朝方小雨がばらつく。 だが空は明るいので出来るだけ作業を進める必要がある。結局，終日曇りの天気となり，作業は大巾に進展した。 まず，排水作業のあと，第二号住居址の微細図をとり，９日夕刻発見の石囲いの遺構を完全に掘り出した。写真撮影も済せ， 遺構のプランを追ったがＢ１区方面には同一レベルに多量の土器が認められる。

また，第二号住居址の遺物を取り上げ， さらにロームを掘込むが，やはり住居址の壁は発見されない。さらにローム層に於ける遺物確認のためＤ13区， Ｅ12区をそれぞれ砂層まで掘込んだがロームでの遺物の確認は得られなかった。また， 第一号住居址の炉址と第二号住居址のレベルを出したが一応同レベルであった。第一号住居址の炉址は床面から二カ所に確認され， その同一床面からも土器，石器が認められる。 第一号住居址として当初円形に分布した土器群は一応セットで発見されたが床面から発見された土器より上層ということになる。さらに， 夕刻になり第一号住居址の実測を行なった。

第7図　発掘途上に於けるアクシデント



7月16日　台風6号の為発掘地域が完全水没

土手を築き調査個所の廃水作業を行なう

廃水後に於ける第1号址及び東西セクションの記録作業

昭和47年7月14日（金）曇のち晴，暑い

天気図によると雨の降らないのが不思議な一日だった。台風6号が接近し東日本全域が雨域にあったが天気はもちこたえた。発掘予定日数は残り少なくなっていたため残りの作業を急ぐ必要があった。まず，遺構の実測から入る。この種の石囲いの遺構には，炉址にもあるが，土器の埋没状態から単なる炉址と異なるものがある。勿論，灰の発見も認められない。一応，石囲い土拡墓として取扱うことにした。この遺構の東西及び南北の断面図及びプランを取る。さらに微細図の作成を済す。また第一号住居址中央ベルトの除去作業を進めた。さらに，D13区，E12区のセクションを清掃し写真撮影を済す。なお，残された最大の作業，トレンチ・セクション取りのための掘込み作業を続ける。だが泥で作業はきつい。明日にはセクション取りが可能か。甲府市広報及びサンケイ新聞社が取材に来る。また，土拡墓の処理について山村氏と協議する。

昭和47年7月15日（土）雨，豪雨（台風6号浜松に上陸）

発掘作業は台風上陸で中止。早朝現場を視察したが昨晩からの豪雨で全域が完全水没。午前中甲府市教育委員会で山本主査，山村主事と土拡墓の処理について話合う。結局，解体し後日復元可能なように南公民館へ保管する形をとる。発掘グリットについては，ほぼ全域の状況把握が完了しているので，後は14日に予定していた東西トレンチの層位実測と，土拡墓の処置を完了すれば調査はほぼ終了に近づいて来た。

昭和47年7月16（日）曇のち雨

台風による豪雨で現場は完全水没のうえ，水位が高く，全ての発掘資材も水没した。テントも半壊状態，全く手のほどこしようがない。地元出身県議長田猪太郎氏の好意で排水ポンプを借用，同時に全員のバケツリレーで水をかき出す作業を進める。

午後2時頃になり，やっと一部で作業が出来る状況となり，まず，土拡墓の処理に入る。埋設された土器をはがすにも幾重にも丁重に重ねられ当初からの遺構であることを確認する。石囲いの石も全てNo.を入れ採集，また，第一号住居址の平板測量によるプランを実測する。再び午後3時頃より雨となる。雨中，東西セクション取りの準備を進める。

昭和47年7月17日（月）晴のち曇

東西セクションの土層図作りにやっと着手できる。現地は第11層から成り，その層位の特徴は第9図の標式図の通りになる，文化層は第6層の黒褐色土層にあることが判明。終日，層位実測と写真撮影を行なう。また，同時に第一号住居址の炉址面での土器の清掃にかかる。特に石囲い炉及び埋甕炉を出し写真撮影を済す。

昭和47年7月18日（火）晴，暑い

早朝の7時から第一号住居址の炉址及び埋甕炉の微細図作りにかかる。9時からの本格的な埋もどし作業に入る前に全ての遺物を採集する。9時より埋もどし作業開始，同時に甲府市教育委員会の山村主事に連絡，現場確認のため甲府市建設部及び作業現場の土木業者の現場確認を得て全日程を終了する。

昭和47年7月19日（水）

7月19日以降，作業実績報告書作成の為の整理作業に入る。

第二節　上石田遺跡出土遺構，遺物一覧表

	名　　称	数　　量
遺　構	縄文時代中期竪穴住居址	2例（石囲い炉址3例，埋甕炉1例）
〃	縄文時代中期石囲い土拡墓	1例
主な置物	縄文中期土器片	ポリバケツ約10杯
〃	復元可能な土器	数個
〃	石器（石斧，石ヒ，凹石，磨石，敲石，石錐，石棒）	約58点
〃	円形土製品（一号址）	1個
〃	土偶（一号址）	1個（その他土偶部分2）
〃	メノー製片	2点
〃	骨粉（一号址）	若干

第三節　上石田遺跡出土の遺構

上石田遺跡発掘調査によって発見された遺構については第二節で紹介した通り縄文中期の竪穴住居址二例及び同期の石囲い土拡墓である。これ等について説明を加えてみたい。

まず，竪穴住居址については第3図に示したグリットC—10区を中心にほぼ半径6mの円形に土器石器が分布していたが，これをもって第一号竪穴住居址として取扱った。また，第3図に示したグリットD—13区を中心にほぼ半径5mの円形に土器，石器が分布したものについて第二号竪穴住居址として取扱った。

この第一，第二号竪穴住居址については，いずれも低湿地地帯の泥沼と化した発掘現場となったためか，かなり慎重を期して探したものの竪穴壁の立ち上り，及び柱穴については，いずれも確認は不可能であった。にもかかわらず竪穴住居址として取扱った根拠としては，第一号住居址についてみれば，明らかに同一生活面上に於ける生活の道具に供した一セットとしての様相が，前記した通り6mのほぼ円形の中に認められたためである。この住居址に於ける土器及び石器その他の一括資料の詳細は後述するが，その分布状況は第9図の通りである。

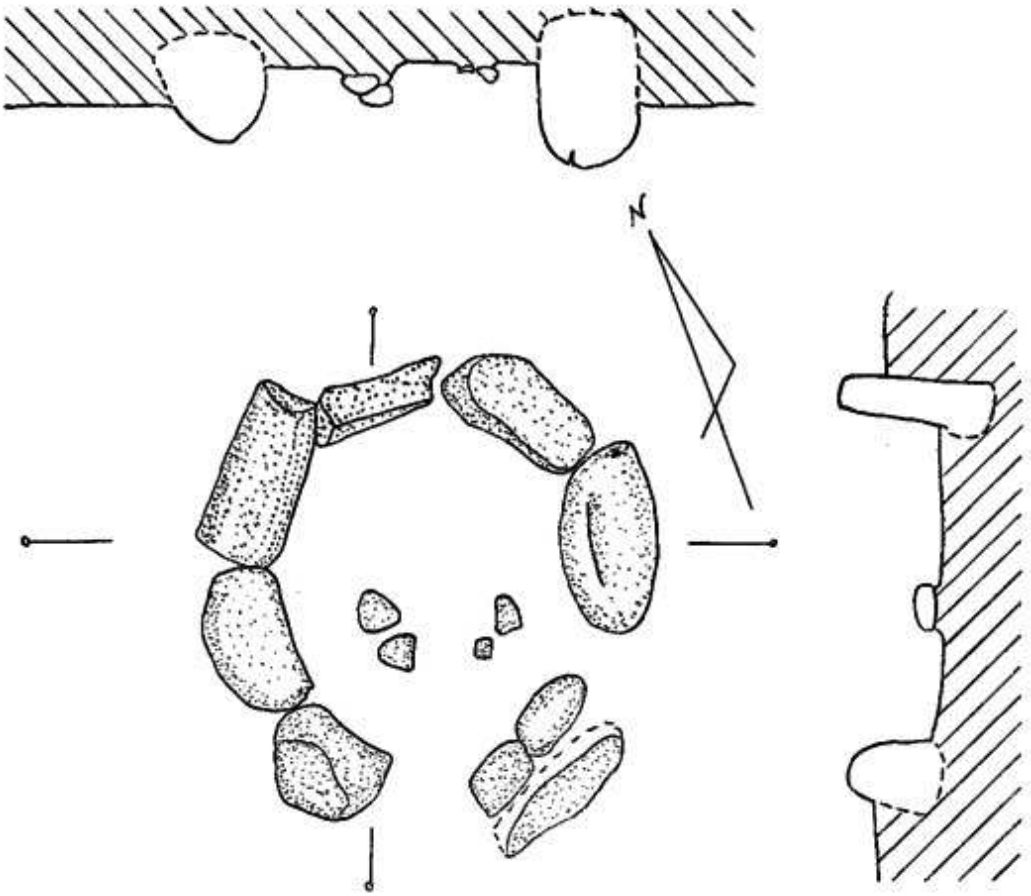
また，第二号住居址については，第11図に示した通り石囲い（コの字型）炉址のレベルにて，5mのほぼ円形の中に土器の分布が濃密に認められたためである。

この第一号，第二号住居址とも床面のレベルは現地表面から—120cmの位置にあって同一であるが，分布の状態に若干様相を異にするものがあった。第一号址についてみると第9図でもみられる通り，ほぼ平均して分布し，明らかに生活時に於ける土器，石器の位置が想定できるのに対し，第二号址はあたかも流されたかの状態に，ある部分に折り重なった状態で発見された。これなど破損した土器と放棄したものとも考えさせられるものがある。

また，特筆すべき点は第一号住居址の第9図に示した土器，石器の分布状況の中にあって，このレベルに於て炉址は住居址南南西の隅に埋甕炉が認められたものの，点線で示した石囲い円形炉址は，このレベルより—10cmの位置にあって，この炉址のレベルにも密着した土器なども認められたことである。この下部のレベルについては一応整理の都合で第一住居址第一次生活面として取扱い，上層については同第二次生活面として呼称し以後説明を加えて行きたい。そして，その第二次生活面に於けるプランは第10図に示した通りである。第二次生活面上で使用したと思われる埋甕炉は，第一次生活面をも切り込んでいるが，土器の型式に於ては第一次，第二次全く同一時期のものであって，土器をみるかぎりに於ては時間差は大して認められない。だが，現実には10mのレベル差が認められるように生活に於ける空間期があったことは事実であろう。

なお，こうした事実は第二号址に於ては全く認められなかった。

また，第一号住居址第一次生活面上にあった石囲い円形炉跡は第8図に示したものであるが，石囲いに使用したうちの一個に石棒を廃物利用したものが認められる。こうした姿から想定すると，このような重量のある物の運搬をそう遠くからすることは考えられず，もしあったとしても土器など重要なものがあったわけで，かつ，近くには荒川もあり，かような資材にはことかかないにもかかわらずその一部に石棒を廃物利用した点で考えられることは，この第一号住居址第一生活面を設定する以前からこの周辺には住居を構え生活していた事実があることも想定されるわけである。勿論，その人達

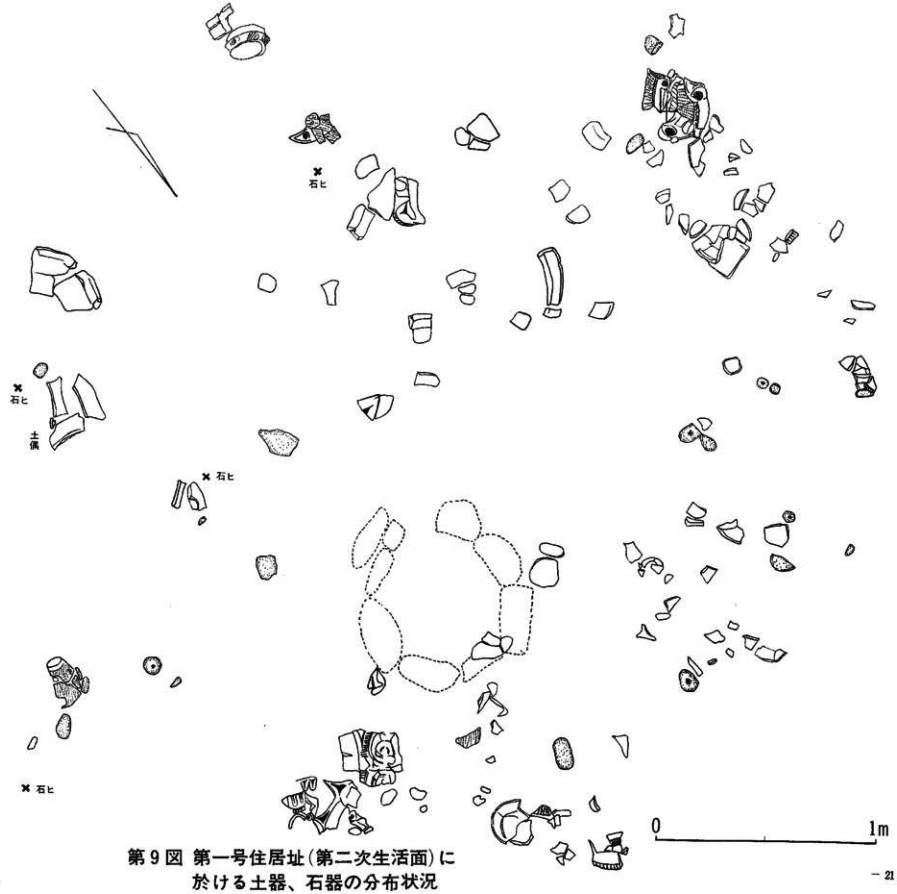


第８図第一号住居址第一次生活面の炉址

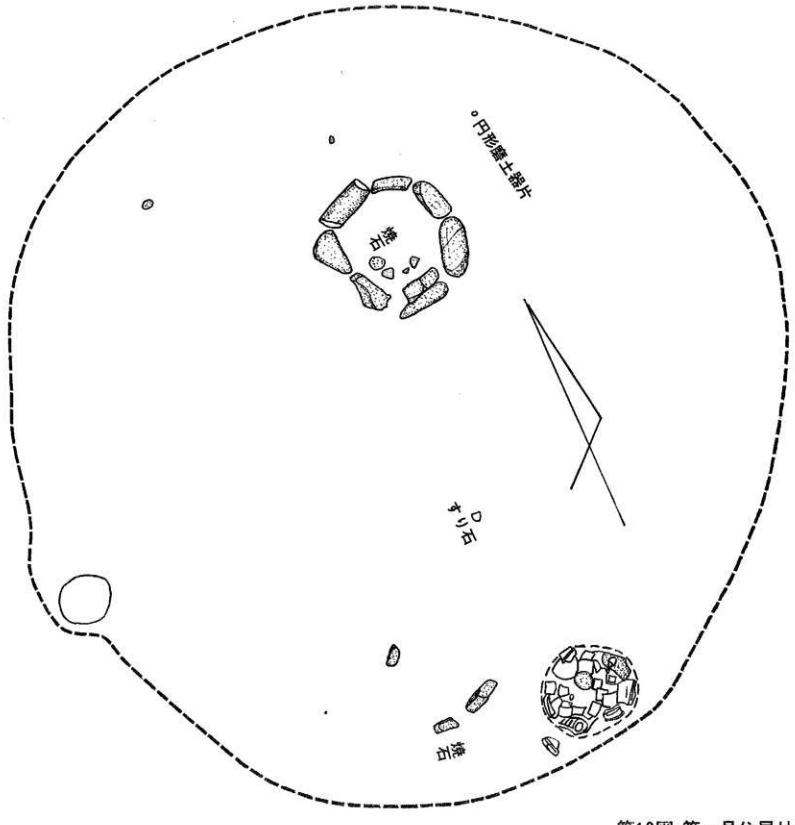
は同一人であるが，遠ってもそう時間的にはかけ離れたものではあり得ないと思われるものである。

また，住居址以外の遺構としては，第３図に示したグリットＡ２区～Ｂ２区にまたがり発見された石囲いの遺構がある。その状況は第12図に示した通りであるが，ほぼ南半分は床面にびしっと土器が敷きつめられてあった。かって，この上石田遺跡に於ても遺跡発見時の緊急調査の折に石囲いの遺構が認められたが，（第２図）明らかにそれは長方形に配石し，その半分に区切った片方に土器を埋め炉址にしたものであったし，こうした例は長野県・茅野和田遺跡でも認められている通りであるが，この石囲いの遺構については全くそれとは様相が異るものであった。当初，炉址も想定し，慎重な発掘作業も進めたが，むろん，焼石，炭などの発見もないばかりか，炉址として使用した痕跡は何一つ確認できなかった。だからという訳でないが，別途この遺構の用途を考察すれば，石囲いの原始土拡墓といった縄文中期に於ける墓制の一つとして，この上石田遺跡の資料を学会へ提供したいと思うわけである。この点については他府県の類例を待ちたいと思う。

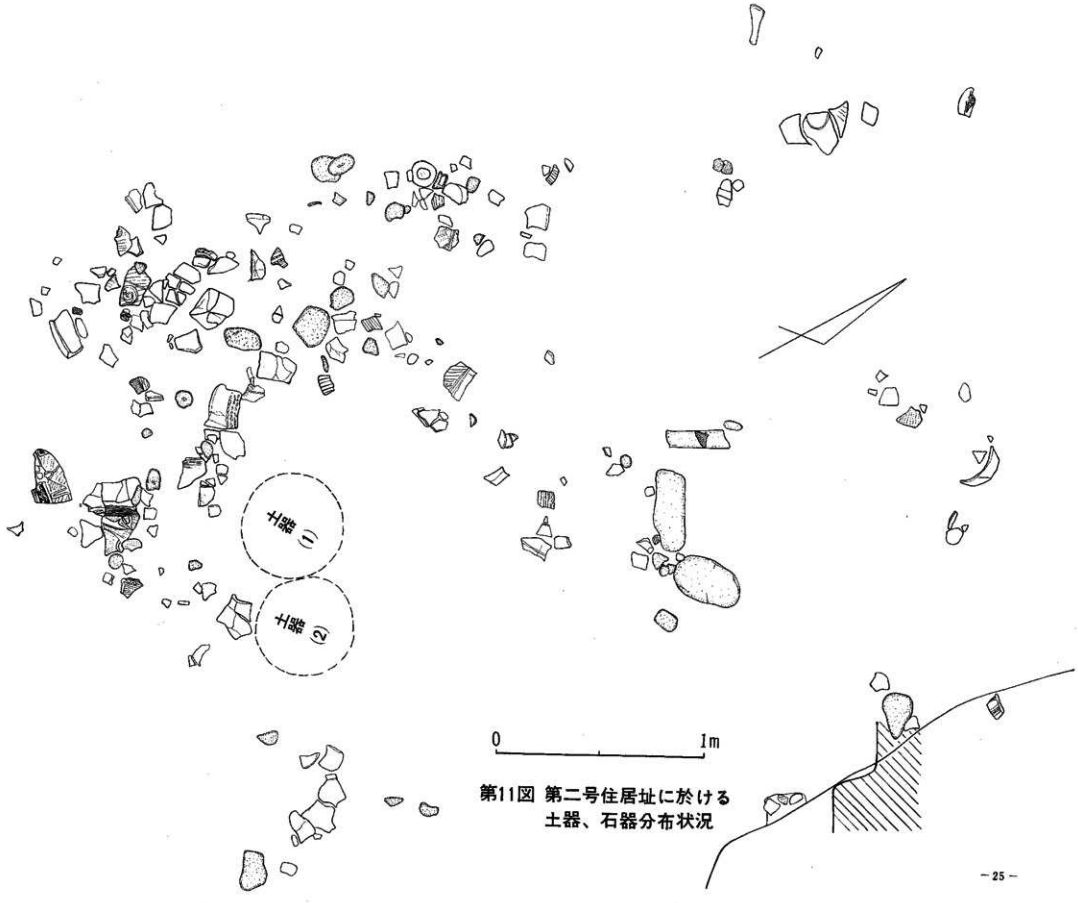
なお，この石囲い土拡墓に埋設された土器は，周囲にも破片が分布していたものと合わせ復元する



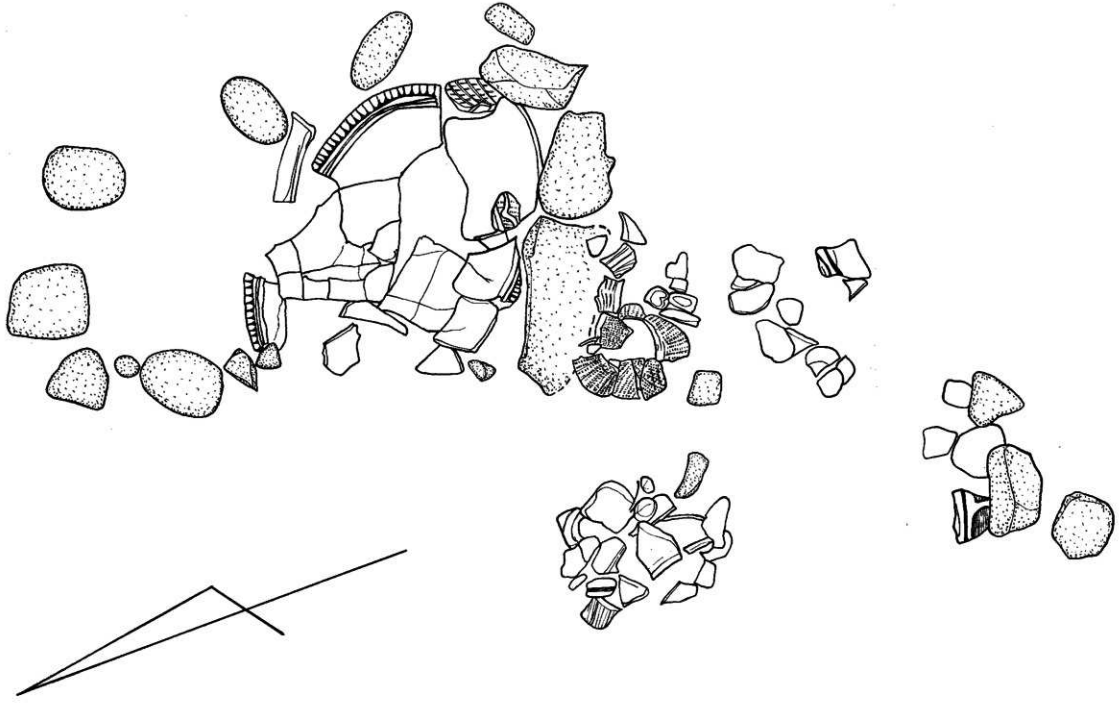
第9図 第一号住居址(第二次生活面)に
於ける土器、石器の分布状況



第10図 第一号住居址(第一次生活面)に於ける
石囲い炉と土器、石器の分布状況



第11図 第二号住居址に於ける
土器、石器分布状況



第12図 石囲い土拡墓と土器分布状況

と，第27図に示した大型土器となった。この土器をその埋設状況からみるならば故意に割って敷きつめたものと思われるがいずれも石囲いの中に土器の裏側を出し幾重にも重ねていたものである。

第四節　上石田遺跡出土の土器

では上石田遺跡出土の土器について紹介したい。一応，整理上の都合から①第一号住居址第二次生活面上の土器，②第一号住居址第一次生活面上の土器，③第二号住居址上の土器，④石囲い土拡墓及び周辺出土の土器として，一括できるものは一括資料としてここに提示する。

出土土器の全ては縄文時代中期後半に位置するもので，これまでの関東編年からすると所謂，勝坂2式～加曾利E 1～2式に当てて考えられて来たところのものである。しかし，ここで土器の説明を加えるに当って，次の理由からして，関東編年でなくして，長野（井戸尻）編年に背うことにした。

本遺跡でも主体となっている加曾利E式土器については，それに先行した阿玉台式土器や勝坂式土器の影響が顕著に現われているものの，前者の加曾利Eは流動的で女性的なものに比し，後者の加曾利Eは，前者の流動的な要素はもつが，異質な男性的なものとなっている。これまで，この双方に対し何等区別することなしに加曾利E式なる名称によって整理研究が進めてこられ，そうしたものへのむじゅんを感じながらも，そのまま続けて来たのが現実の姿であった。したがって，加曾利E式としながらも，加曾利貝塚E地点出土の加曾利E式とは似ても似つかないものが実在したわけである。阿玉台の影響を受けた加曾利E式については，一応，ここではふれないことにするが，勝坂式の影響を受けた加曾利E式については中部高地一帯にその分布をみるし，かつ，地方色も濃厚に出て，関東，伊豆，中部高地全域に分布をもつものから，ある地域，地域に小さな分布をもつものなど，さまざまである。当然，それなりに独立した文化とまでいかないまでも特色は充分認められるもので，これ等のものについて，やはり関東編年でない独立した型式が望まれるところであった。たまたま，そうした気運の中に長野県富士見町周辺遺跡から良好な資料が竪穴単位で，かつ，竪穴の重複から，それ等の時間差を明確に示しながら得られた（昭和40年）わけで，これは今後の縄文中期の研究に画期的な進歩をうながすものになると思われる。富士見町周辺遺跡は総称して井戸尻と呼ばれているが，特に中期後半の加曾利E式のみならず，それに先行した勝坂式，並びに阿玉台，さらに先行した五領台式下小野式等に亘る中期全般の資料の全てが，関東編年でなしに，中部高地の現実の生活に供した道具から明らかにされた点は相応の努力の集積の結果であるは言うまでもない。私はその辺の事情について井戸尻編年の主唱者である藤森栄一氏に，土器細分の意向を講演会の席上でお伺いしたが，質問の仕方が悪かったためか，研究の為必要だからです…といった短い期待通りのお答えを得られなかった経験があるがとにかく，こうした姿からして井戸尻編年による土器分類，研究の方が少なくとも山梨県内に於ては関東編年より明確にその文化の性格を掌握できるものと思われるわけで，当上石田遺跡に於ける土器分類もそれに従ってみたわけである。勿論，こうした井戸尻編年での試みは私自身別の遺跡のものでも既に試みているが，こういう資料の集積によって井戸尻編年がより確定したものになることも望むところである。それが山梨県を含めた中部高地に於ける中期縄文文化解明への最短距離であると思うからである。

① 第一号住居址第二次生活面（上層）上の土器

第三節でもふれた通り第一号住居址には下層にも生活面が確認できたため，上層については第二次生活面として取扱うことにした。

この第二次生活面に於ける土器，石器分布状況は第11図に示した通りであるが，そのうち土器など復元可能なもの，図面上復元が可能なものをまとめると第13図に図示した12個体に及んだ。勿論，実数は土器拓影2—10で示した通り，明らかに図示した土器以外の破片が認められるように，これを上回ることは確実であるが，これ等の小破片からは復元は困難であった。しかし，一応，第一号住居址第二次生活面上の土器として第13図の土器群と拓本をセットとして資料提示を行ないたいと思う。

第13図に図示した12個の土器についてみると，したがって同一時点で使用され時間差はないと考えられるわけであるが，文様などからみて異質な存在は7の連続刺突文による押象文土器である。これなどは大型破片からの復元によるものである。器形は甕形というより鉢形に近い形をしていて，セットとして資料が得られなければ，もっと時代をさかのぼらせて考えるところのものであるが，ただ一部分に粘土紐を粘りつけその両端に逆八の字型に篦による連続刺突文がみられる点が，このグループに入れても納得できる点であるといえる。次に10，11，12の土器については，埋甕炉として重ねて置かれ，その周辺に1の浅鉢が配置されていたものである。当初10，11，12については第十一図版でみるように復元が可能なような状況で発掘されたものの，整理の段階で全く別個体のものの廃物利用といった点が明らかとなった。土器型式からみると一応，櫛形文に特長をもつ井戸尻Ⅱ式に考えられるが，3，9などは藤内Ⅰ式，1，10，11，12などは藤内Ⅱ式としてとらえることもできる。また，拓影の中には曾利Ⅰ式にみられる過巻文大把手の破片もみられる。（第14図土器拓影1）ように，この第一号住居址第二次生活面の末期では曾利1式まで，下らせて考えなければならない。

第一章第二節でもふれた通り山梨県下に於ける遺跡の分布をみた場合，常識的には丘陵，山岳地帯に占地する中期縄文の遺跡が標高263mのこの低地にまで下りて来るのに，やはりこの土器型式が示すように藤内Ⅰ式～井戸尻Ⅱ式までかかり，この住居址の終焉は曾利Ⅰ式ということが仮設として立とう。

② 第一号住居址第一次生活面（下層）上の土器

図らずも第一号住居址第二次生活面下—10cm～15cmの位置にもう一つの生活面が確認できた。それは第11図及び第九図版に示した通りである。この床面からは第10図及び第十図版で示した石囲い炉址も発見されたり，第九図版でもみられる通り，床面に密着した土器の手前に焼石がハの字型に埋没されてあった。これなども炉址の残存状況であるとみられる。

ここからは後述もするが磨石の完全なものや，土製円盤なども床面に密着した形で発見されている。実はこの第一次生活面の床面のレベルが後述する第二号住居址床面，および石囲い土拡基と同一レベルにあって，第二次生活面だけがそれより浮いた位置にあったことになる。しかし，第二号住居址でも石囲い土拡基でもその上層に第二次の生活面なり遺構は全く認められなかった。

第一次生活面から出土した土器は破片であるが完全に一個体分であった。時間をかけて復元作業を進めれば，ある程度の器形が形づくられようが，とりあえず第14図土器拓影1で図示した通り藤内Ⅱ式の浅鉢型土器であろう。

③ 第二号住居址上の土器

第二号住居址に於ける土器，石器分布状況は第11図及び第十二，十三図版で示した通りであって，第一号住居址第二次生活面に比べると破片は大型である。そして炉を中心とした周囲に分布しているのと異なり，炉の南側に集中して分布がみられる。その状況はあたかも流されたかの状況で同一土器片も散乱した状態で確認された。第11図でそれは理解できると思われる。また，同図に土器(1)，(2)と点線で示した部分は記録以前に取り上げられた土器片の散布地点である。

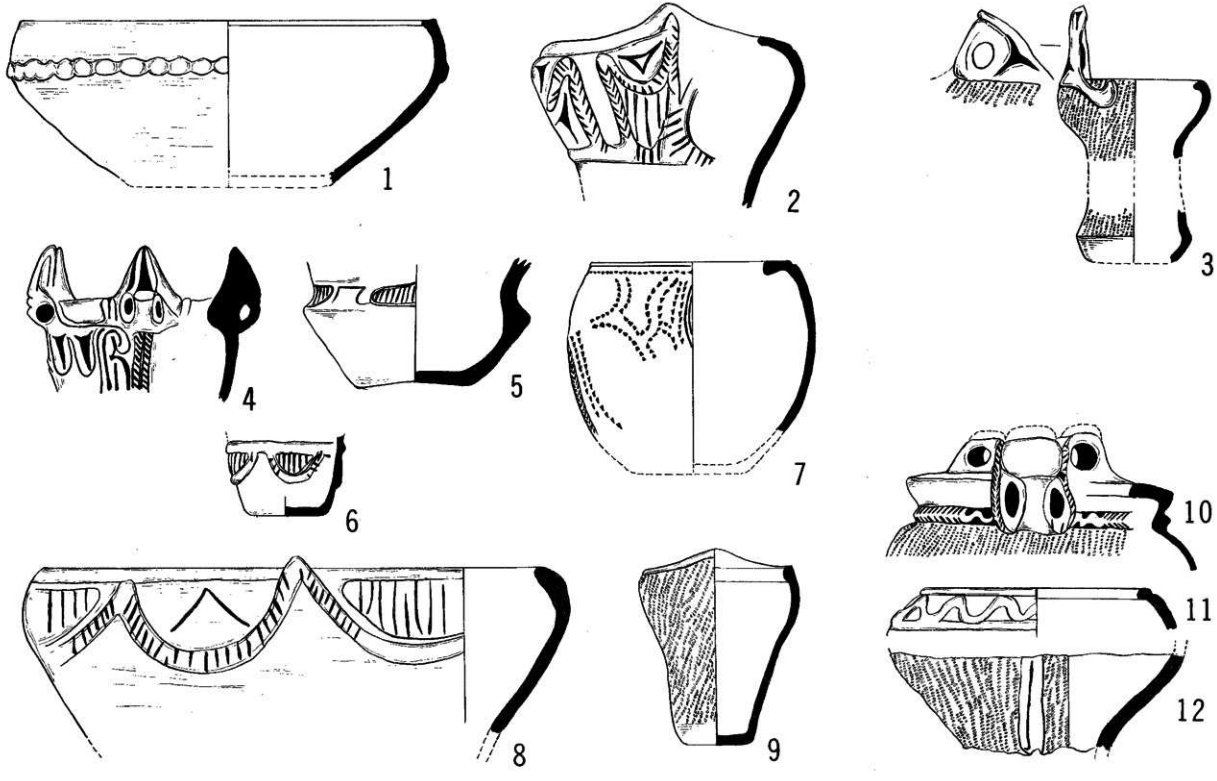
また，第二号住居址の土器は第24図土器拓影11～12で示した通りであるが，曾利Ⅰ式に該当する。土器は厚手が多く口辺部が外反した器型が多い。整理人員の陣容の都合と時間の関係で，この第二号住居址の整理が最も遅れたが，この部分の詳報は上石田遺跡の全容をとらえる上でも当然必要なわけで後日にまた機会を作り報告したい。

④ 石囲い土拡墓及び周辺出土の土器

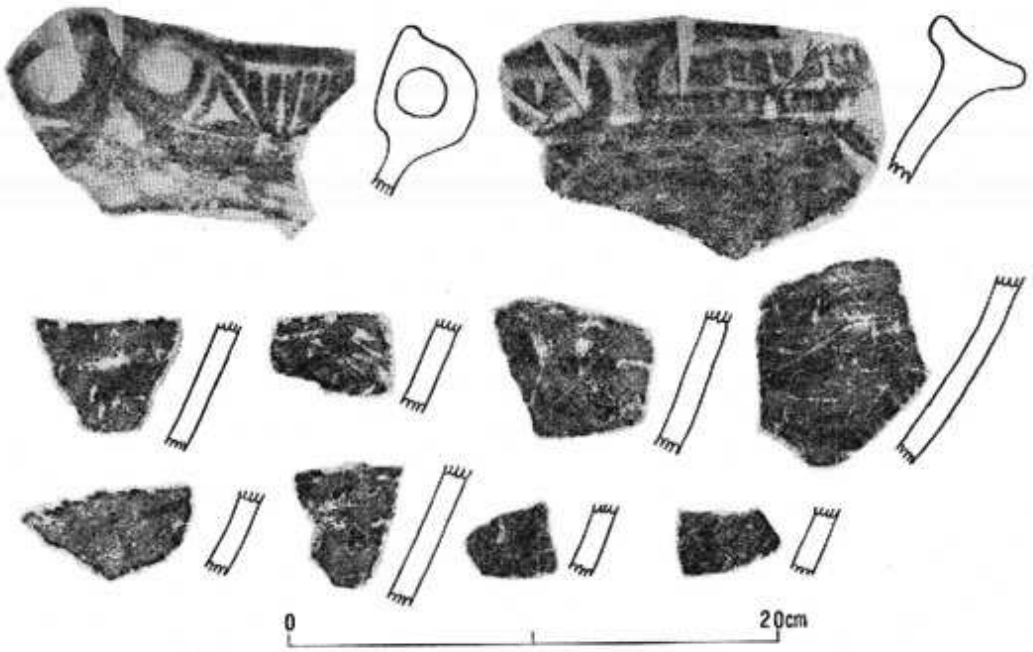
石囲い土拡墓については第三章第二節でも述べた通り，土拡墓だという根拠は特別にない。しかしこれが炉址であったという根拠もないわけである。ただ類似したものではかって上石田遺跡でも第12図に示した通り，長方形に石囲いした二分の一の片方の中央に埋甕を設けた炉址の発見があったり，あるいは，長野県茅野和田遺跡和田西３号住居址，井戸尻の曾利18号住居址等でもみられるが，少なくともこの上石田の石囲いの遺構がそれと同様と決するにはあまりにも様相が異なりすぎる。

なお，この節では土器の説明が必要なので遺構そのものについては今後の類例資料で究明するという事で本題に入って行きたい。この石囲い土拡墓及び周辺地域に於ける土器出土状況は第12図及び第14～17図版に示した通りである。特に土拡墓内に埋設された土器及び周辺地域から出土した土器の復元図は第27図に示した通りであるが，1，3は型式的に曾利Ⅱ式，2は曾利Ⅲ式Aに分類されよう。1は口辺の一部分と底部を欠くほかはほぼ完形に近い状態に復元されたが，丁度その破片の全てが土器内側を表に石囲いに重ねて埋設されていた状態であった。そしてそれは，石囲いの中に埋甕炉のような形で設置されたものではなく，この遺構を作った時点で土器を割りはめ込んだ様な形で構成されていたものであった。

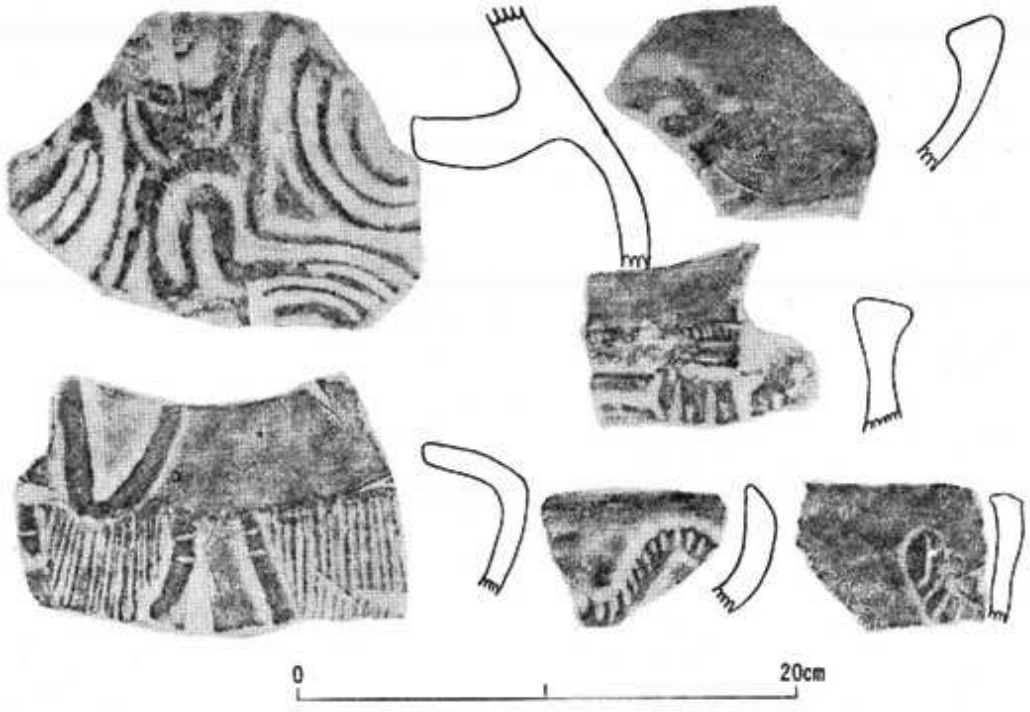
また，発掘作業の時点で，この遺構あたりで動物の歯を一本発見した。もとよりこの遺構発見前のできごとと，泥沼と化していた現場にあって攪乱によって混入した動物の歯くらいに扱ってしまったが，あるいは人間の歯であればこの土拡墓そのものの大きな裏付けが得られたわけでもあったが，この点は発掘担当者としての責任を感じている次第である。周辺土器については第27図の２，３が認められたが特に２は遺構の石組みに一部がのせられた位置にふせられてあった。２の土器もこれと同一レベルにあって，時間的な差はないものといえる。



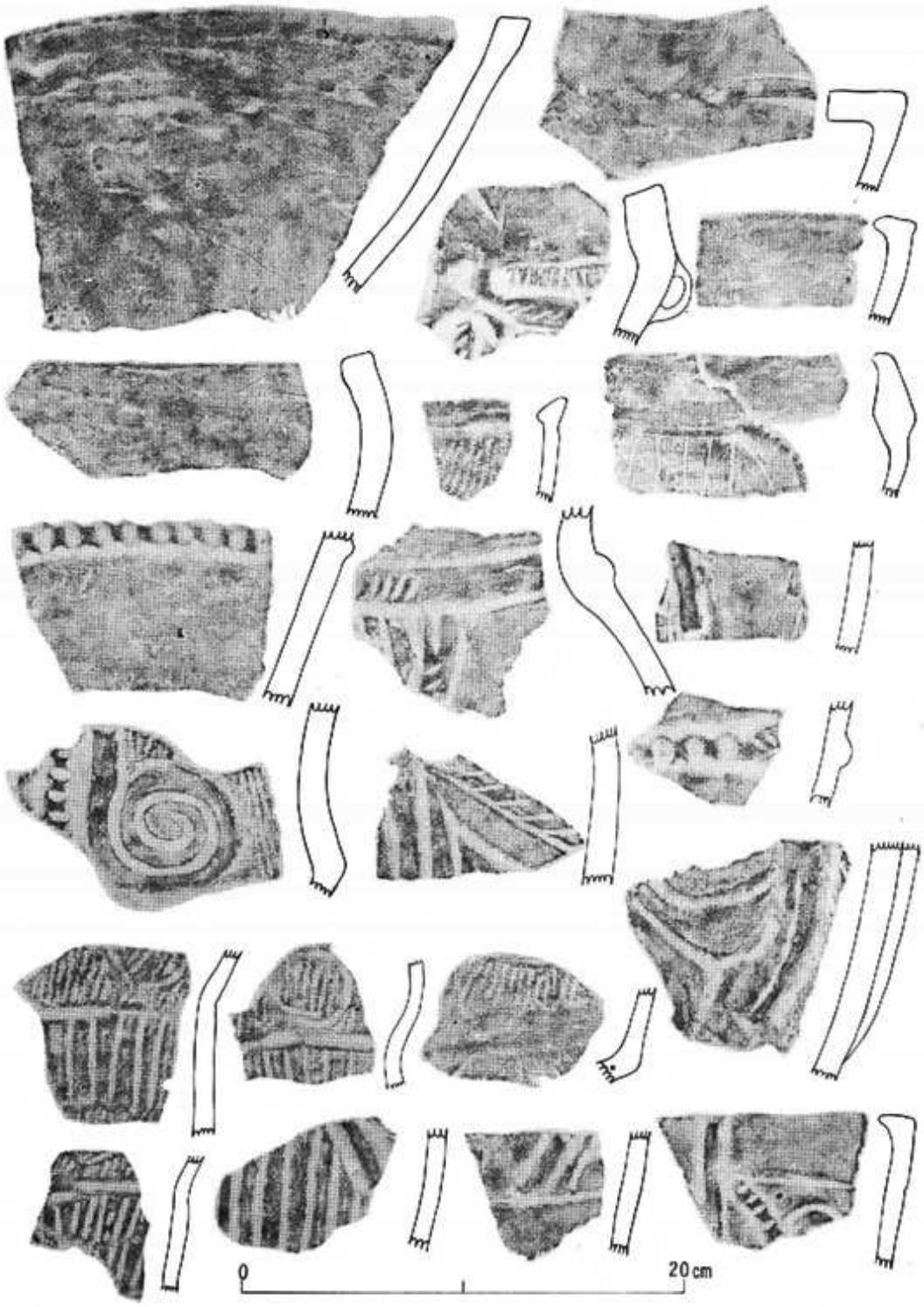
第13図 第一号住居址(第二次生活面)
出土土器実測図(3分の1)



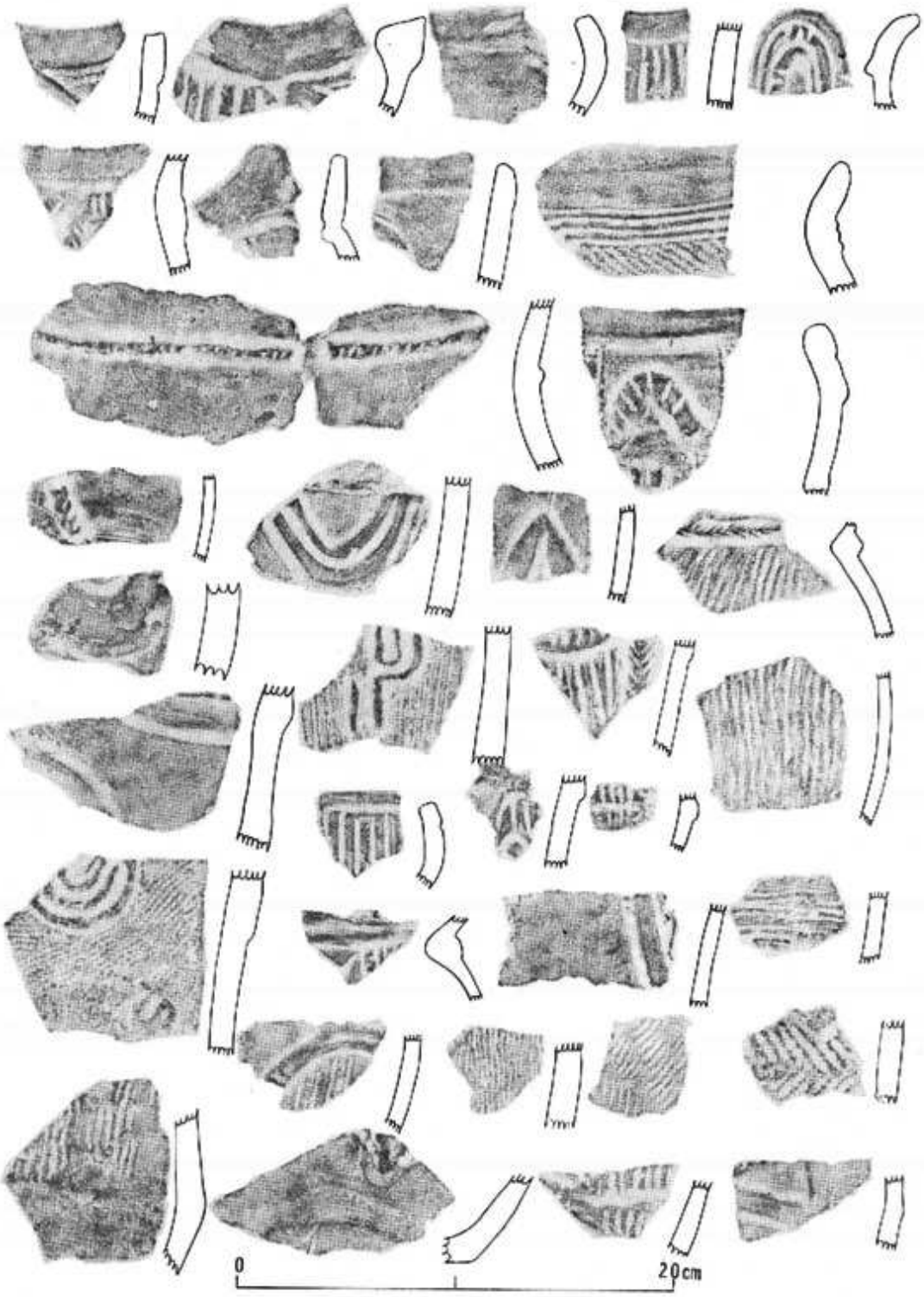
第14図　土器拓影１（第一号住居址第一次生活面出土土器）



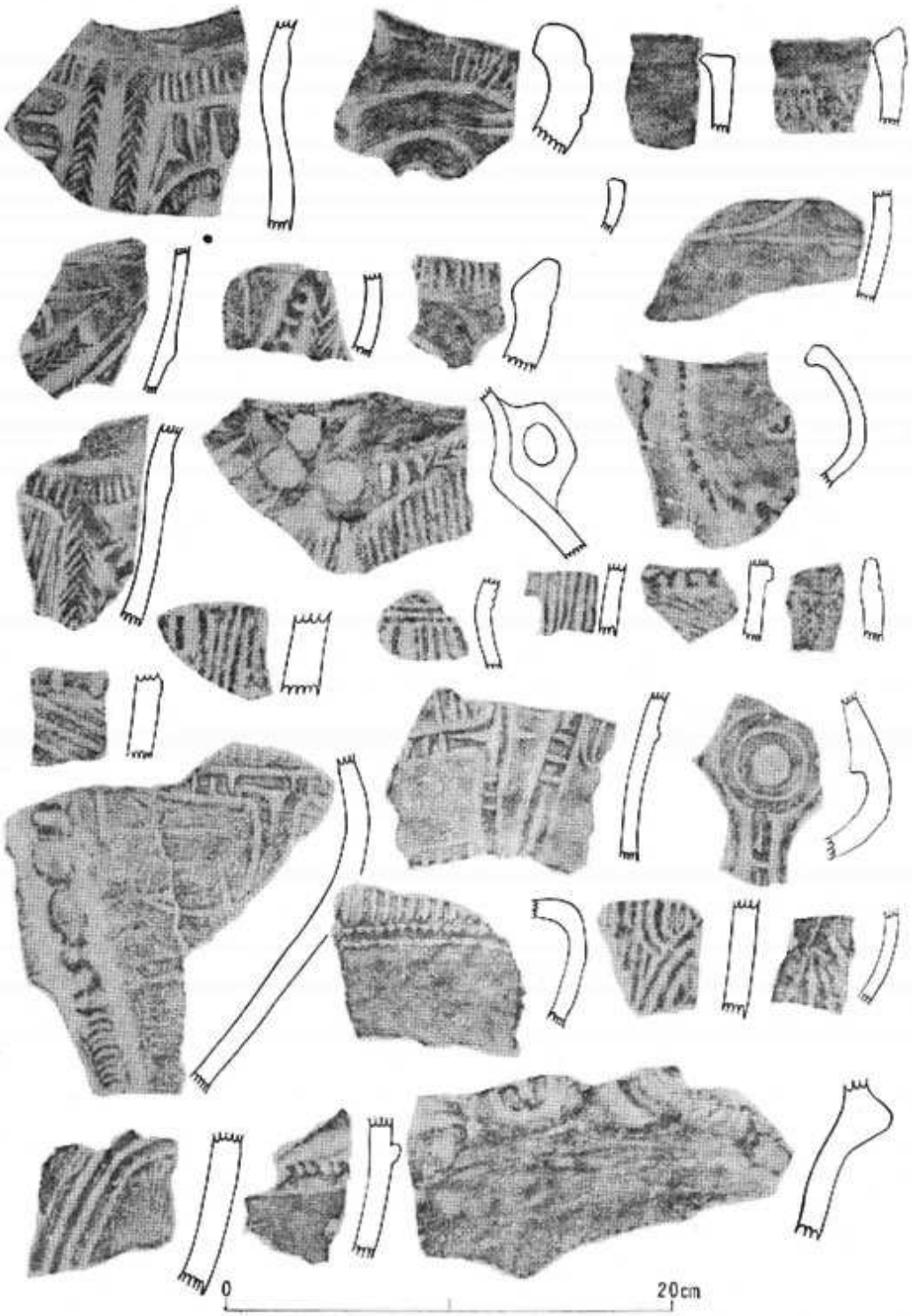
第15図　土器拓影２（第一号住居址第二次生活面出土土器）



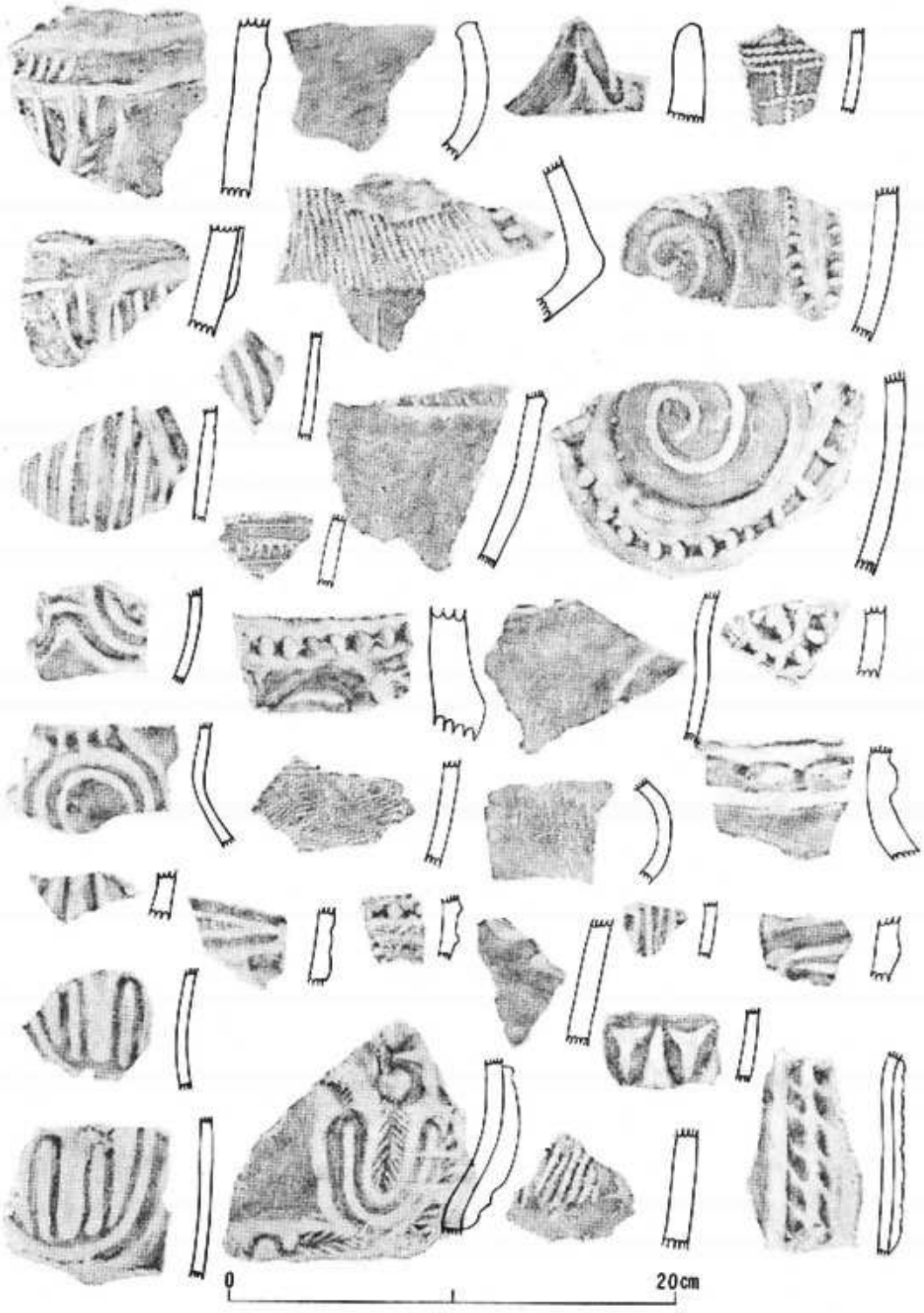
第16図　土器拓影３（第一号住居址第二次生活面出土土器）



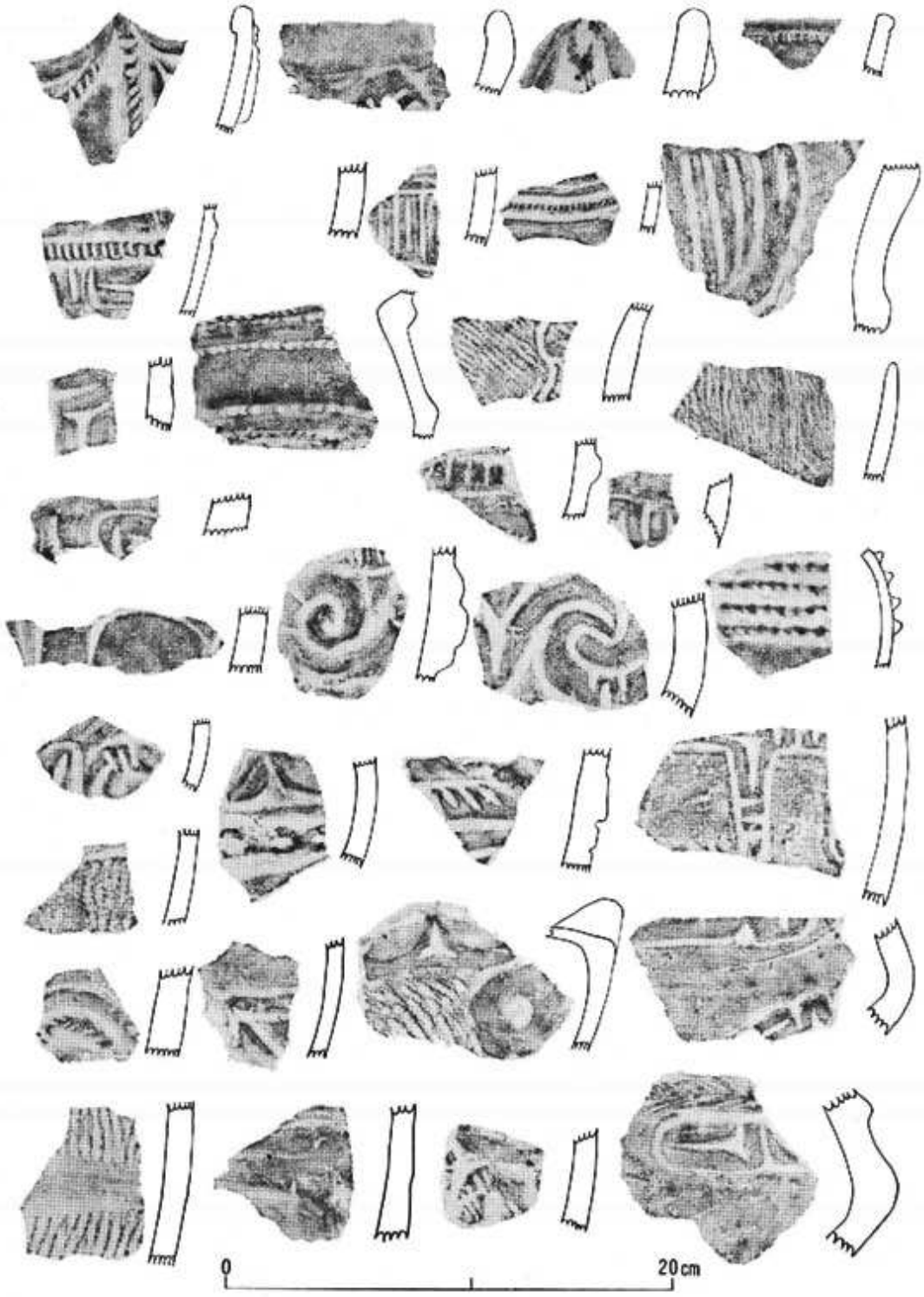
第17図　土器拓影４（第一号住居址第二次生活面出土土器）



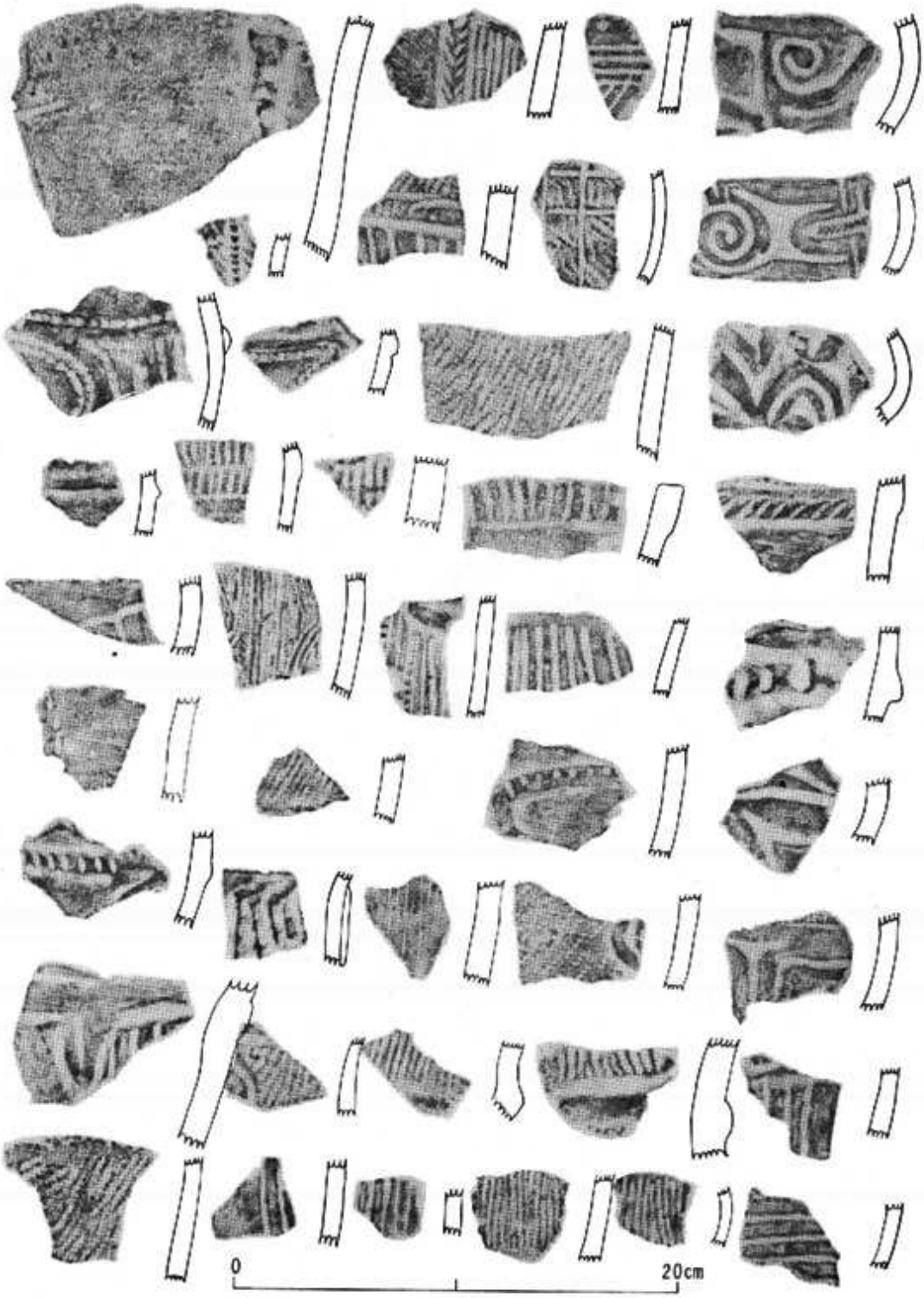
第18図　土器拓影5（第一号住居址第二次生活面出土土器）



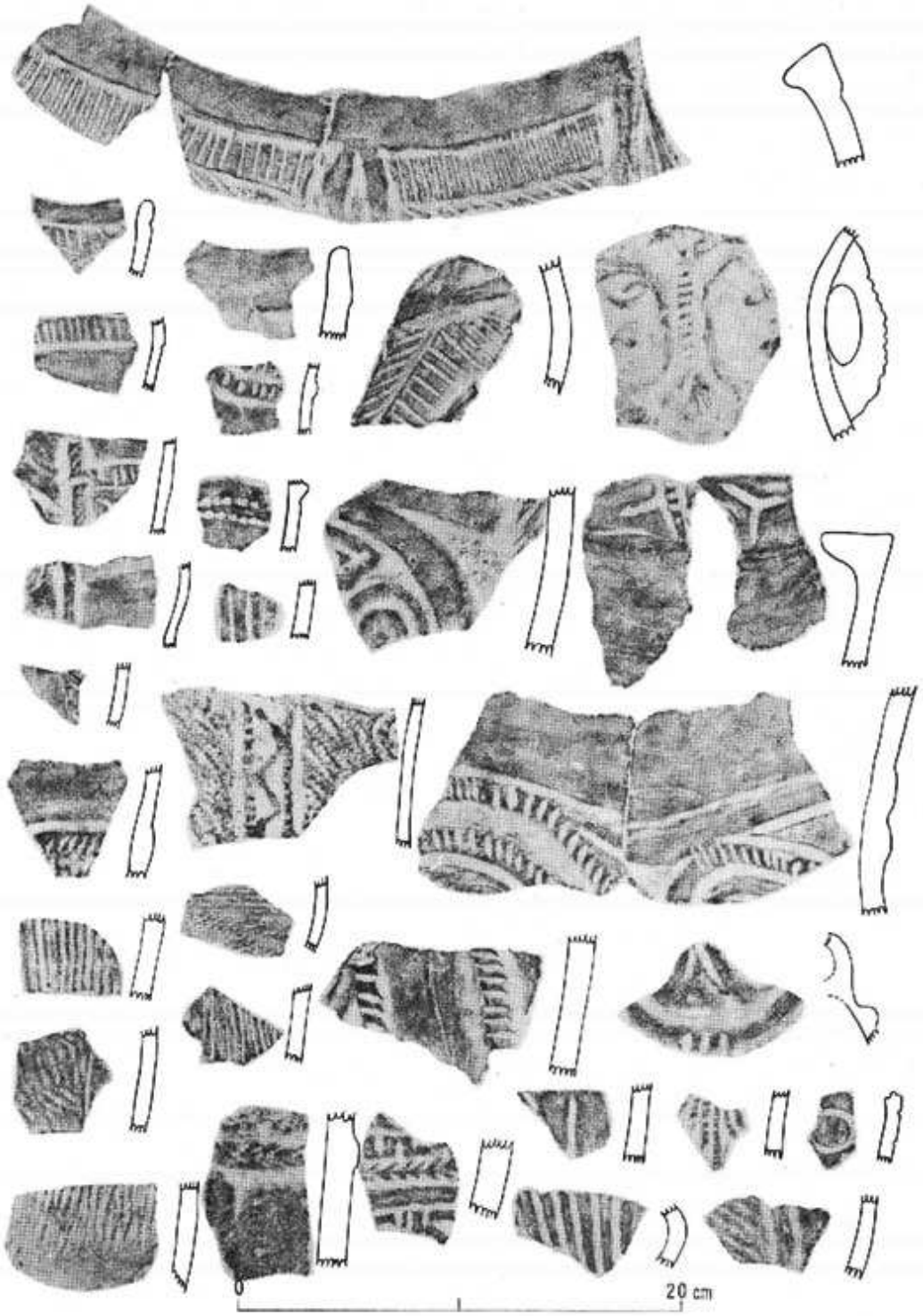
第19図　土器拓影6（第一号住居址第二次生活面出土土器）



第20図　土器拓影７（第一号住居址第二次生活面出土土器）

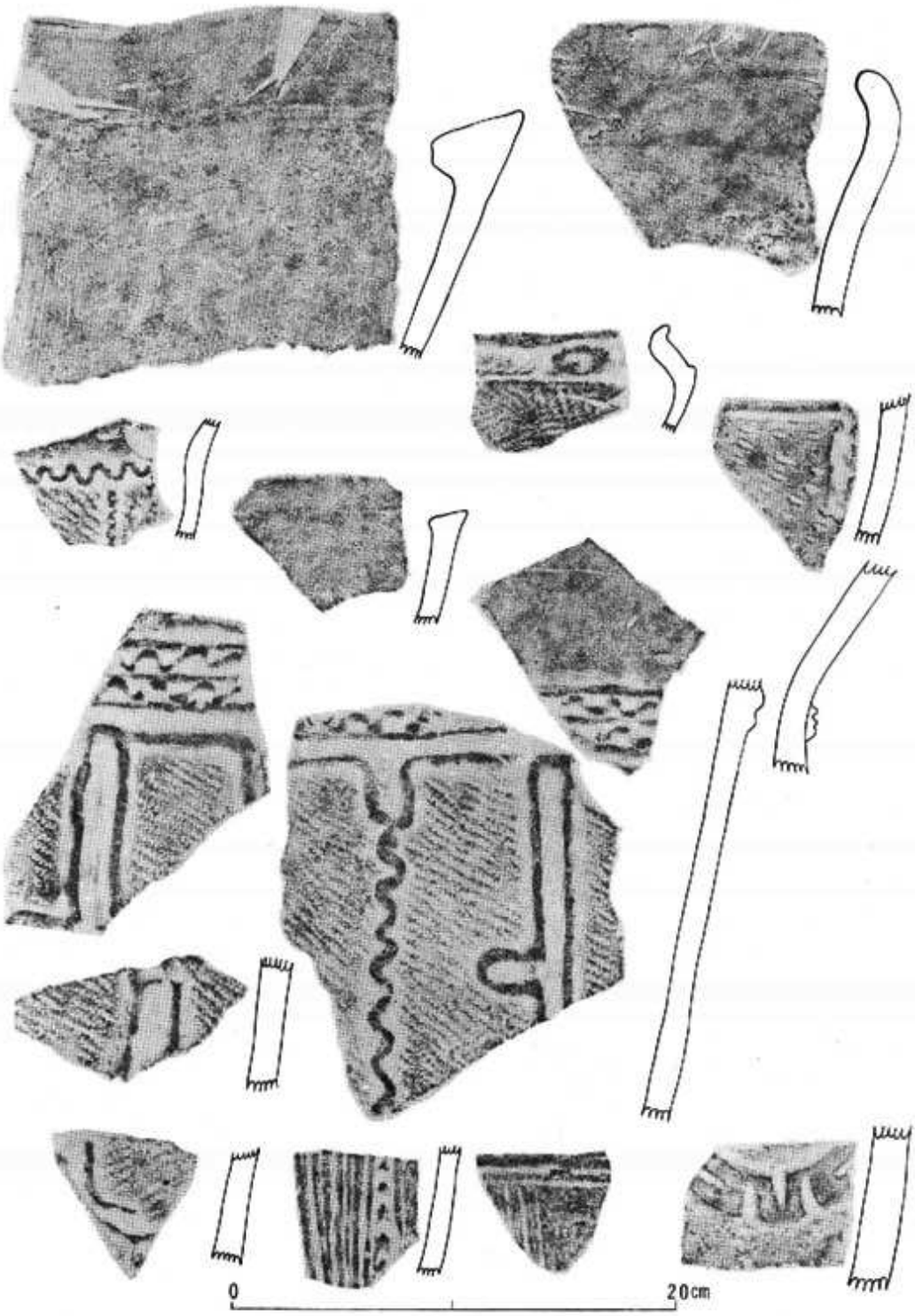


第21図　土器拓影８（第一号住居址第二次生活面出土土器）

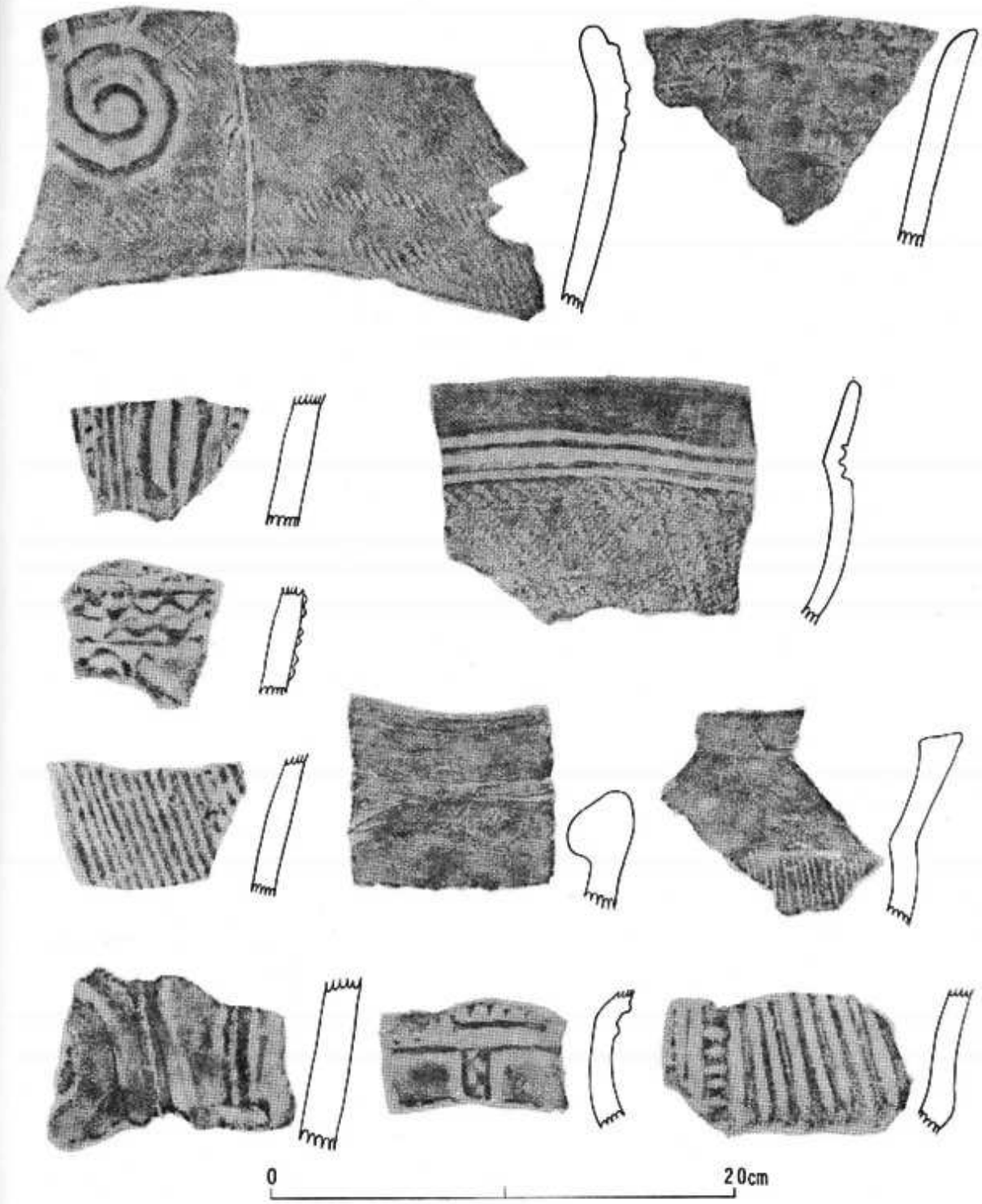


第22図　土器拓影 9（第一号住居址第二次生活面出土土器）

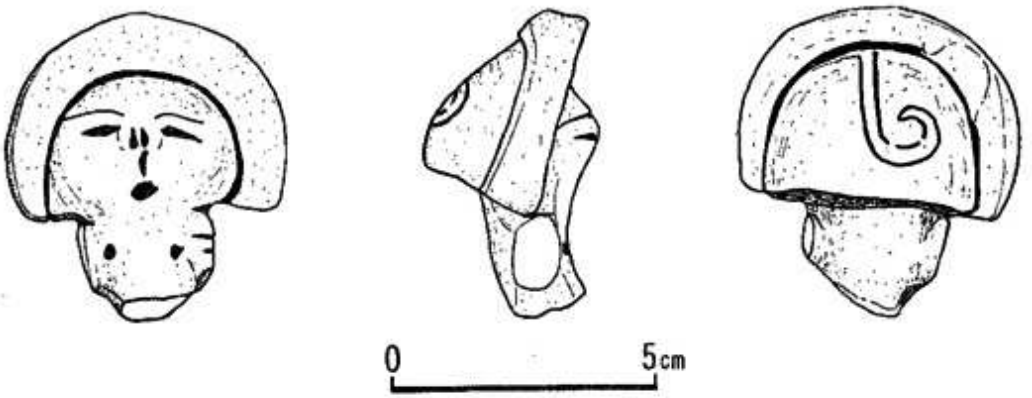
第23図　土器拓影10（第一号住居址第二次生活面出土土器）



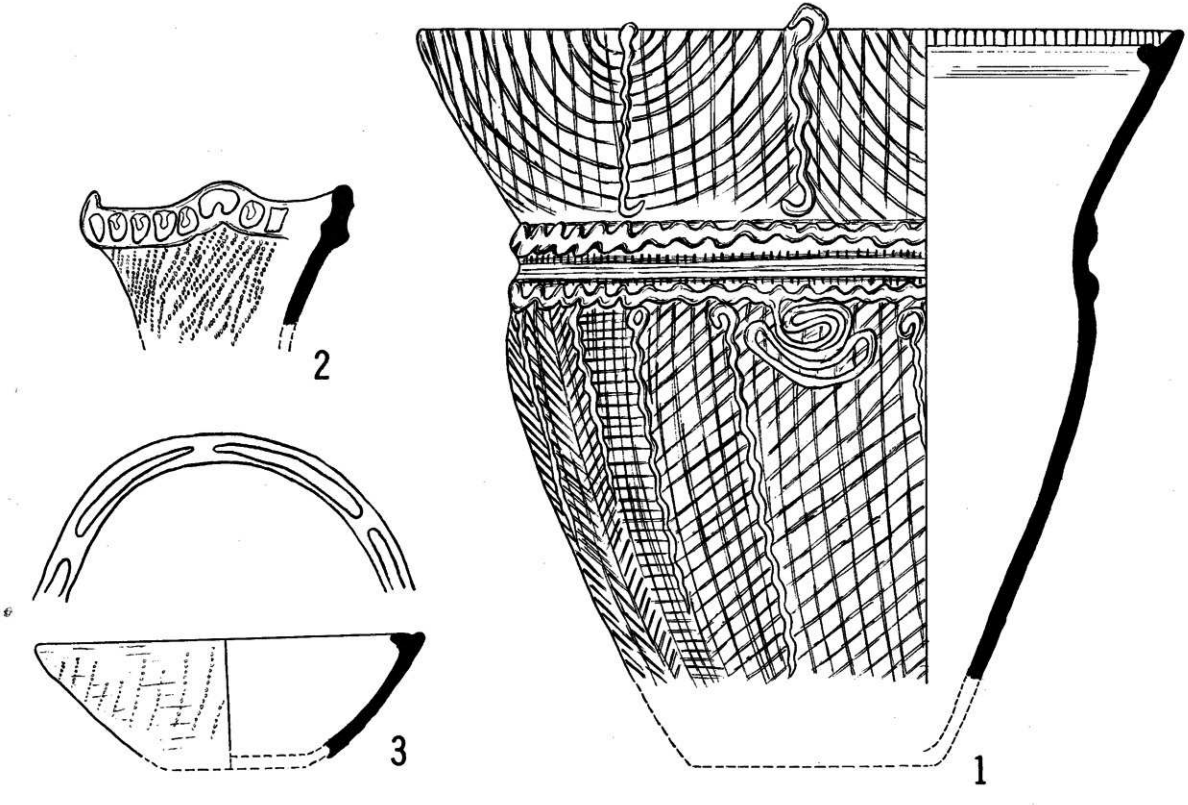
第24図　土器拓影11（第二次住居址出土土器）



第25図　土器拓影12（第二次住居址出土土器）



第26図　第１号住居址第一次生活面出土土偶実測図



第27図 石囲い土拡墓出土土器及び
周辺地域出土土器実測図（3分の1）

第五節　上石田遺跡出土の土製品

①土　　偶

上石田遺跡に於ける土器以外の土製品については第26図及び第八，二十図版に示した土偶がある。これは第一号住居址第二次生活面から略々南を向き立てられた形で発見されたが，天地，左右とも約5.5cmの小型。人物は胸の部分に小さな刺突文で乳房を表現した女性であり，手及び足を欠いている。これは他の土偶と同様に手，足を欠くこと自体にも重要な意義があったものと思われる。

また，同上第二次生活面上からは，一括採集資料の整理の途上で第二十一図版に示した土偶の手，足と思われる部分がそれぞれ確認された。これなどは逆に胴部が分離しているわけで土偶の用途，性格を知る上での一資料として提示できると思う。

②土製円盤

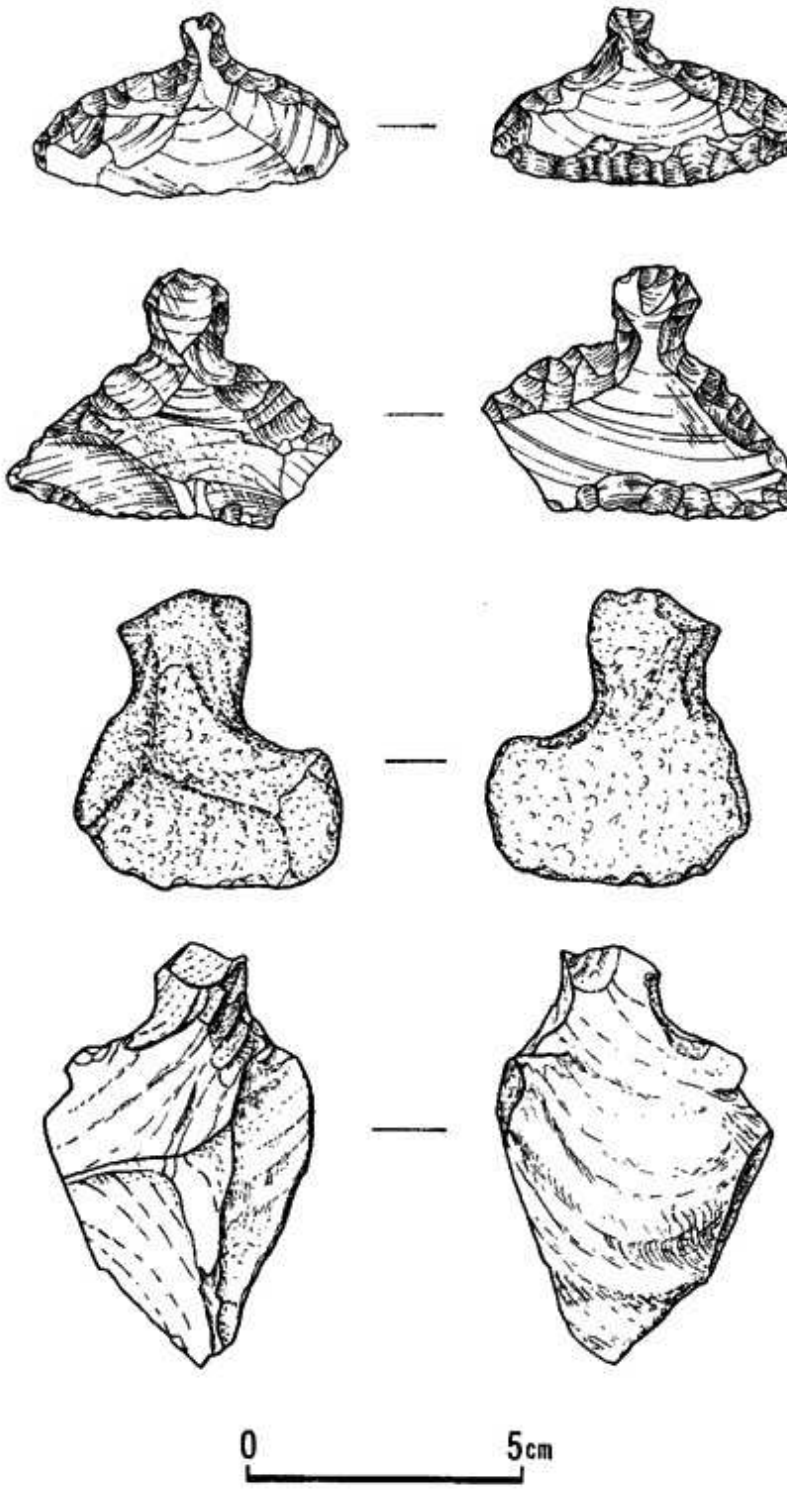
また，第一号住居址第一次生活面からは，第十九図版に図示したところの土製円盤1個が発見された。これは大体縄文中期の遺跡なら比較的発見例の多い遺物である。破損した土器の一部分をもって周辺を磨き円形に形づくったものであるが，その用途については明確なものが出されていない。

第六節　上石田遺跡出土の石器

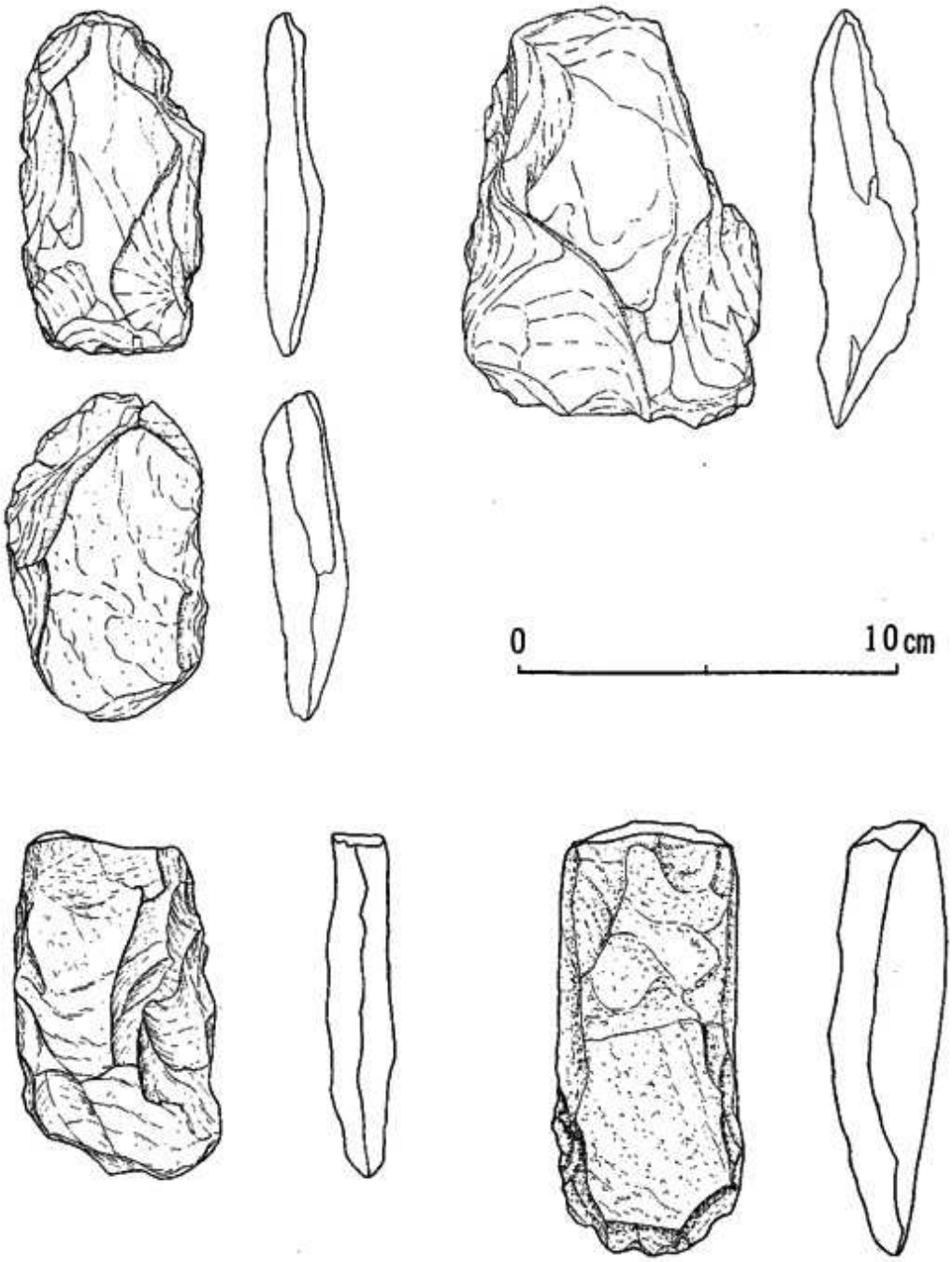
上石田遺跡に於ける石器は比較的多く，かつ発掘面積の割合いからすると多様性に富んでいる。まず，その点数，内訳については下記石器一覧表の通りである。

上石田遺跡出土石器一覧表

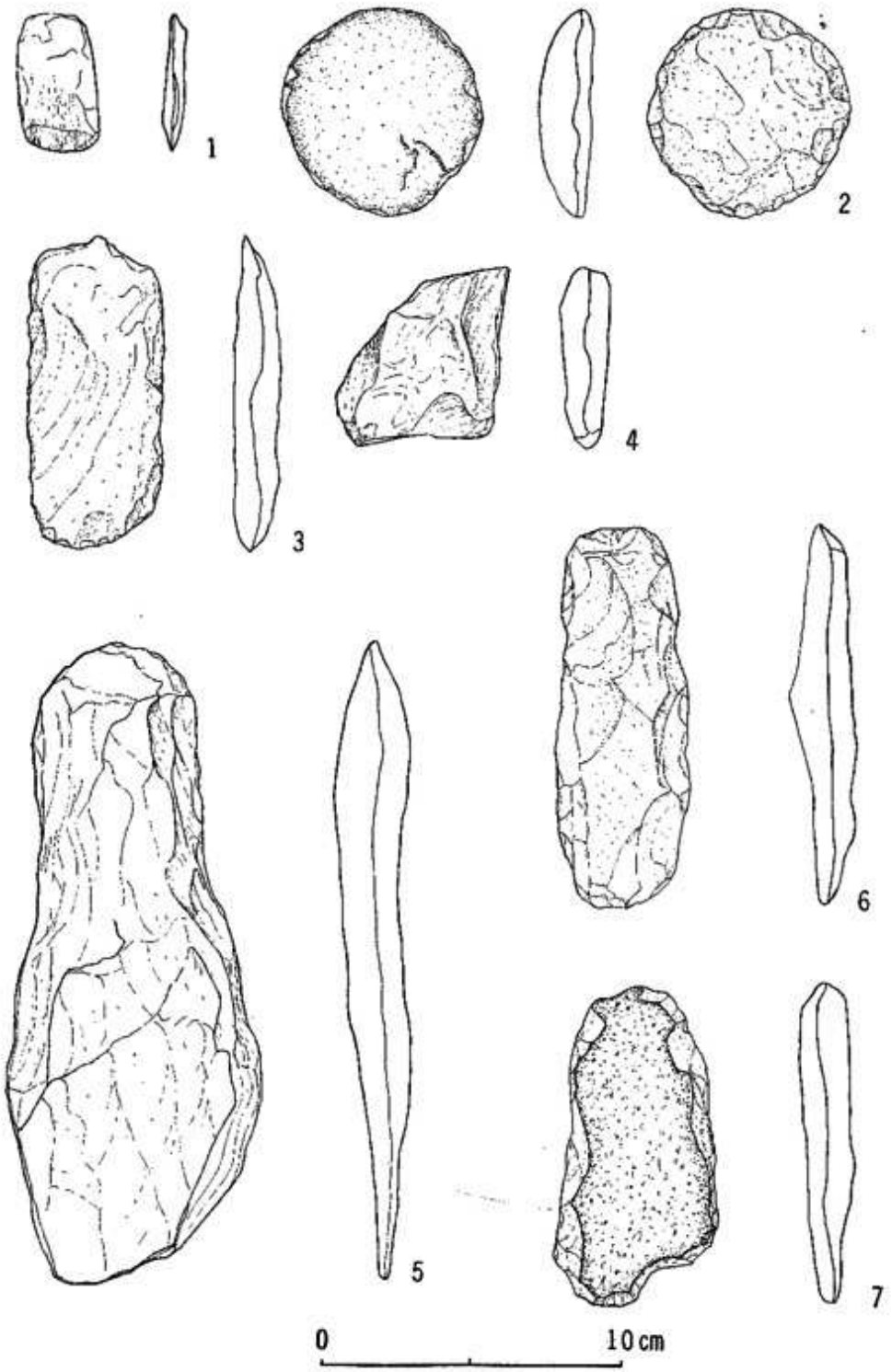
名称		個数	出土地点				図版
			第一号住居址(第一次生活面)	第一号住居址(第二次生活面)	第二号住居址	その他	
石碑		4		4			
石鏃		1				1	
石斧	打製	10		5	5		
	磨製	1			1		
	円形	1			1		
敲石		18		8	8	2	
磨石		4	1	2	1		
凹石		12		7	2	3	
多孔石		1		1			
玉石		5		1	4		
石棒		1	1				
計		58	2	28	22	6	



第28図　第一号住居址第一次生活面出土石ヒ実側図



第29図　第一号住居址第二次生活面出土石斧実測図



第30図　第二号住居址出土石斧実測図

① 石　　ヒ

石ヒについては4点発見されたが，いずれも第一号住居址の第二次生活面上からである。それ等の遺物は第28図及び第二十二図版で示した通りであるが，形態としては非常に整ったものが認められる。1，4についてはチャート系，2は黒曜石，3は安山岩系の素材で作られている。

② 石　　斧

石斧は総数で12点を数えるが，そのうち打製石斧については第29図，第二十六図版，第30図，第二十七図版で示した通り第一号住居址第二次生活面と第二号住居址から平均して各5点づつが認められた。磨製石斧，及びあまり発見例のない円形の打製石斧がこのほか第二号住居址からは発見されている。材質としては玄武岩，安山岩系のものが多い。特に第二号住居址の第30図5に示された大型石斧など含め，石斧の用途，分類などからもきわめて興味深いものがある。

③ 敲　　石

敲石については点数が非常に多かった。これなど近くに荒川の本流があったため素材を求めることも容易であったがためであろう。総数にして18点を数えたが，そのうち第一号住居址第二次生活面から第二十八図版に示した8点，第二号住居址からは第二十九図版に示した8点が各々確認された。またその他グリットからも第二十九図版に示した3点が確認された。

④ 磨　　石

磨石は総数で4点の発見があったが，形の最も整ったものは第二十二図版に示した第一号住居第一次生活面発見の1点，他の第一号住居址第二次生活面の第二十三図版の2点，第二号住居址の1点は部分的に磨石に利用した痕跡が認められたものである。

⑤ 凹　　石

凹石は敲石の次に点数が多かった。特に凹石の中にも敲石に供した痕跡の認められるものもあったが，一応それ等のものについてはより特徴の顕著な方へ分類した。凹石については第一号住居址第二次生活面から第二十四図版に示した7点，第二号住居址から第二十五図版に示した2点，その他グリットから第二十五図に示した3点が確認されたが点数的には第一号住居址第二次生活面へ片寄っている。

⑥ 多　孔　石

また，第一号住居址第二次生活面からは第二十四図版で示した多孔石1点が認められたが，⑤の凹石と同様用途は発火器具の一部であるだけに，第一号，第二号住居址とも火の利用のひん度の多さを物語る資料である。

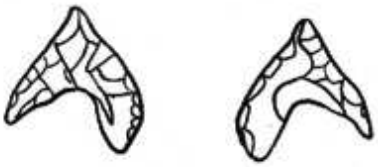
⑦ 玉　　石

第二十八図版に示した玉石は5点数えるが第一号住居址第二次生活面から1点，第二号住居址から4点発見された。丸々と磨かれてあるため一応遺物として扱ったが用途は不明。また，この程度のものなら河原へ行けばいくらでもあるので，石器の素材を探しに荒川へ出た縄文時代人がついでに持ち帰ったとも思えるものである。

⑧ 石　　棒

第8図及び第十四図版に示した第一号住居址第一次生活面上の炉址に使用した石の中に一個石棒を

廃物利用したものが認められた。炉石の採集にはこと欠かない地域にあって石棒を廃物利用した点については，その要因は解らないが，石棒の性格を知るうえでも興味深いものがある。



第31図　石鏃実測図

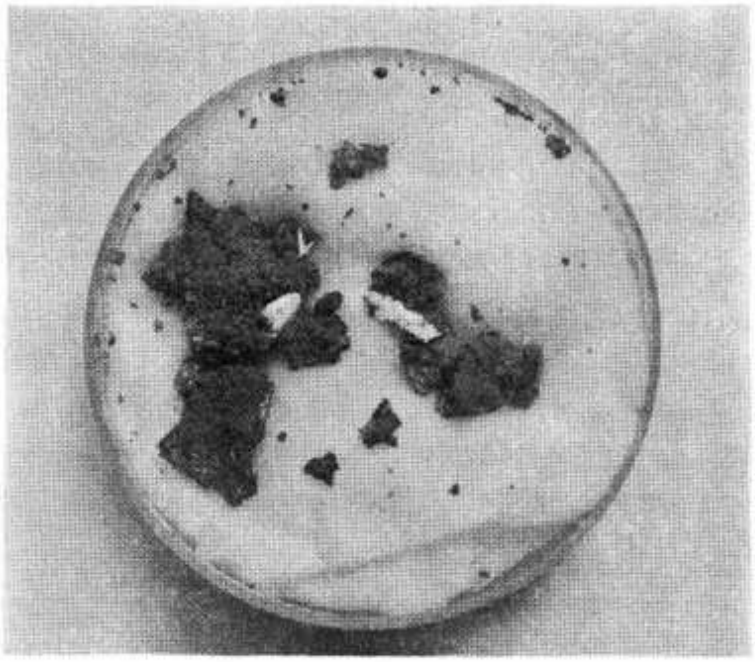
⑨ 石　　鏃

石鏃についてはその他グリットからただ1点のみ発見された。素材は黒曜石で第31図及び第三十図版に示したものである。

以上が上石田遺跡出土の石器の概要であるが，これだけの石器が揃っていながら石皿等についての遺物は全く確認できなかった。

第 七 節　　上石田遺跡出土のその他の遺物

その他の遺物としては第一号住居址第二次生活面上からは平均して骨粉が認められた。食料に供した小動物のものか人間のものかは分析しなければ解らないが第32図に示したシャーレ内の白い遺物がそれである。



第32図　第一号住居址第二次生活面出土の骨粉

第四章　ま　と　め

第一節　上石田遺跡に於ける成果

上石田遺跡発掘調査に於ける成果は学術的にみて顕著なものがある。第一に甲府盆地底部に於ける初の縄文遺跡が解明された点である。これまで本県に於ける同期の遺跡は全て山岳地帯，丘陵上に占地し，こうした低地に於ける存在は，発掘調査後の結果としてはうなずけるが，以前では全く予期されないことであった。

しかも，単に遺物包含層を確認したというものだけでなしに定住の証しである竪穴住居址及び縄文時代に於ける墓制の一例として資料提供をするところの石囲い土拡墓の発見など，今後の甲府盆地先住民の歴史をつづる上で重要な資料となる。

また，住居址の一つからは明らかに生活のセットとしてとらえられる土器の組合わせ及び石器，土偶などが明確な記録と共に得られたことにより，中部高地の縄文中期の編年研究の上に，さらに中部高地の中期縄文文化解明への一資料として重要な役割を果すものといえよう。

出土遺物のバラエティに富んだ内容の深さからみても，単なる移動の過程で残した遺跡でないことは明確となり，かなり長期に亘っての定住の場所と考えられるが，それなりに甲府盆地底部に於ける中期縄文の標準的な生活の一断面がとらえられた点で満足すべき成果が収められたといえる。

第二節　今後の問題点と課題

ここに上石田遺跡発掘報告書が刊行されたが，採集された資料についてはまだ色々な角度から分析し研究されなければならないことは云うまでもない。特に土器については復元作業をさらに進め，明確な個体数や組合わせの実態をさらに掘り進める必要があり，その意味では発掘担当者に残された課題はまだまだ多い。こうした資料の組み直しや新資料の紹介は後日引つづいて何等かの形で公表したいと思う。

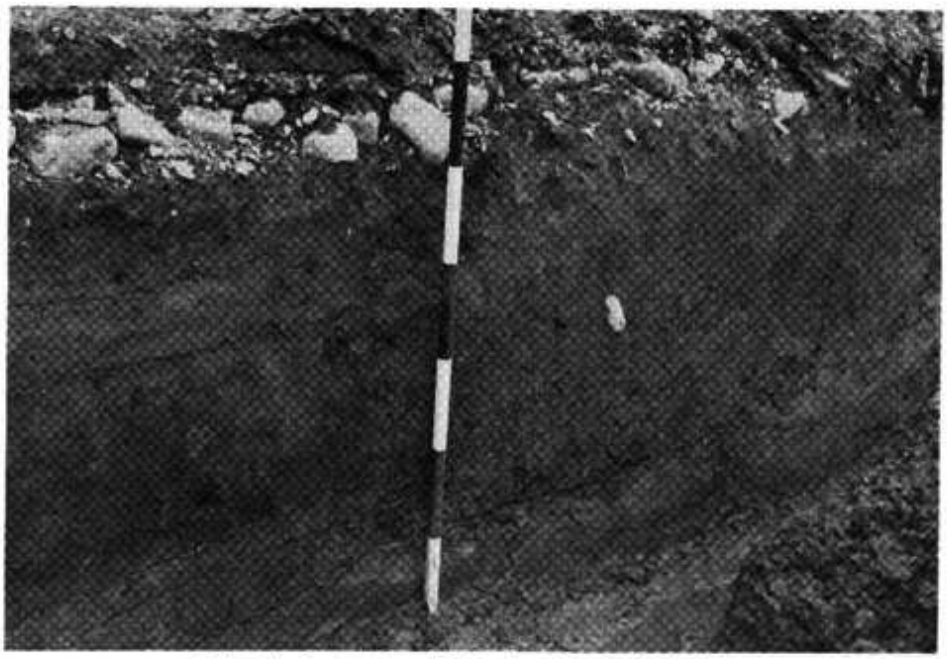
また，今回の調査に於て，この上石田遺跡の内容の濃さが明確に出されたが，区画整理事業内に含まれた部分以外にも遺物包含層が広範囲に広がっており，さらに開発から破壊される以前に抜本的な未発掘地域の保存体制の確立が必要かと思われる。この意味では開発の激しい甲府盆地にあって，行政関係者に善処を研究者の立場から要望する次第である。まだ建造物のない現在こそ絶好機であってここが住宅密集地となってしまってからでは手おくれである。場合によっては第二次，第三次とこうした発掘調査が必要であるともいえよう。

図　　版

上石田遺跡全景（西方より望む），画面全体が遺物散布地。道路先方の矢印下が今回発堀地点

上石田遺跡東方を流れる荒川の現況。大きく（約90°）カーブした地点。現在河川改修工事が進められている。

上石田遺跡東西トレンチ断面



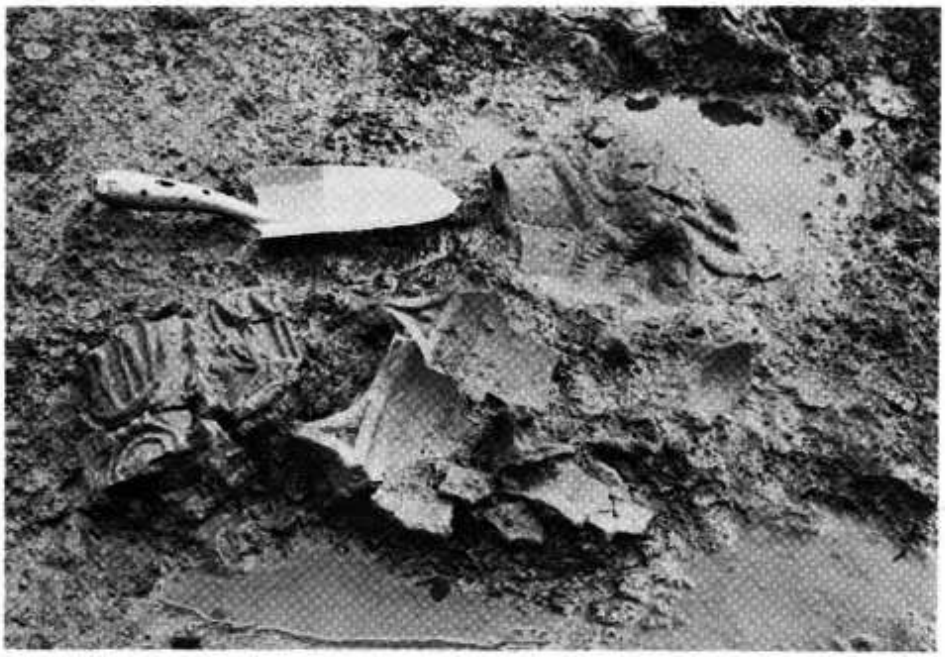
東西トレンチの深くくい込んだ攪乱層

第一号住居址（第二次生活面）の土器出土状況

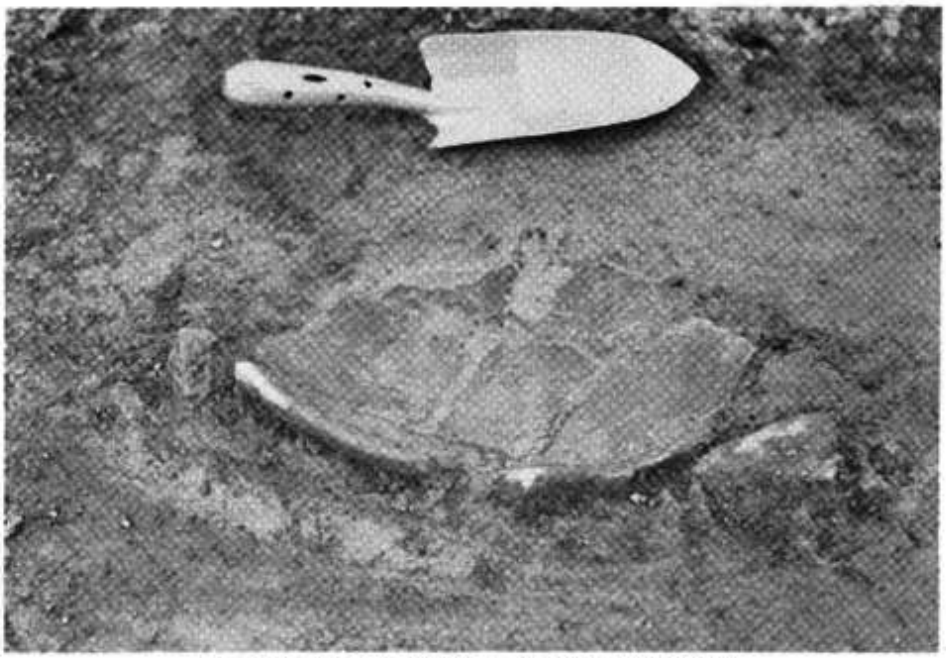
同上遠景、ほゞ円形がみられる

第一号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況

第一号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況



第一号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況



第一号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況

第一号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況

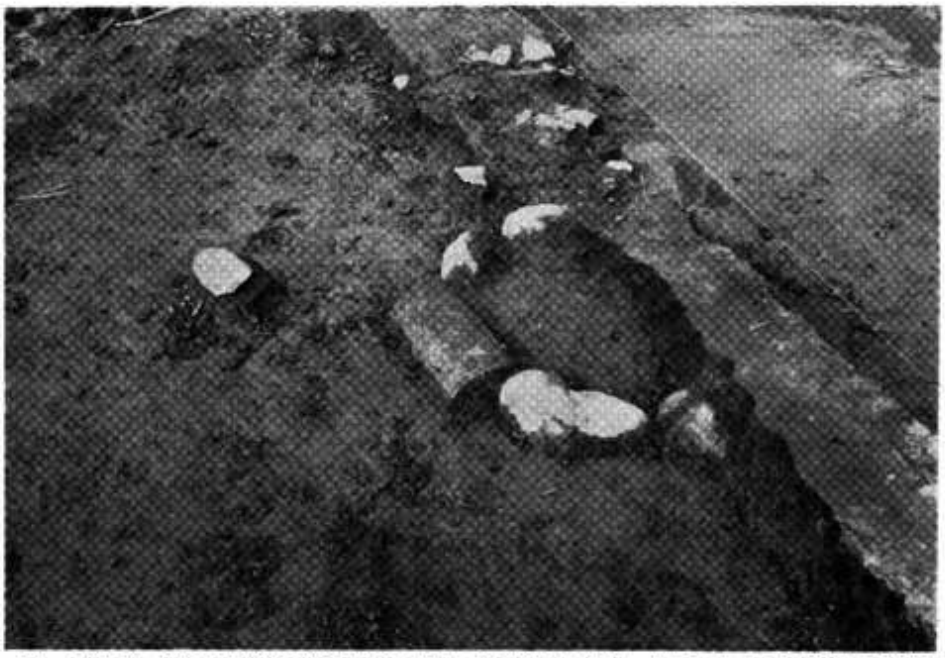
第一号住居址）第二次生活面）に於ける土器，石器（石ヒ）出土状況

第一号住居址（第二次生活面）に於ける石器（石ヒ）出土状況

第一号住居址（第二次生活面）に於ける土器出土状況

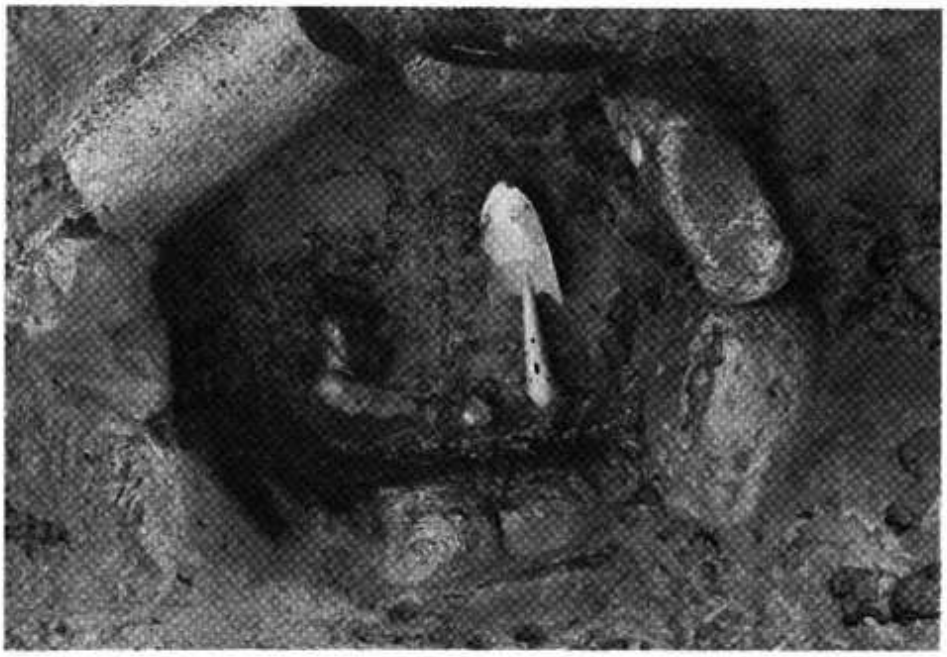
第一号住居址（第二次生活面）に於ける土偶出土状況

同　　上

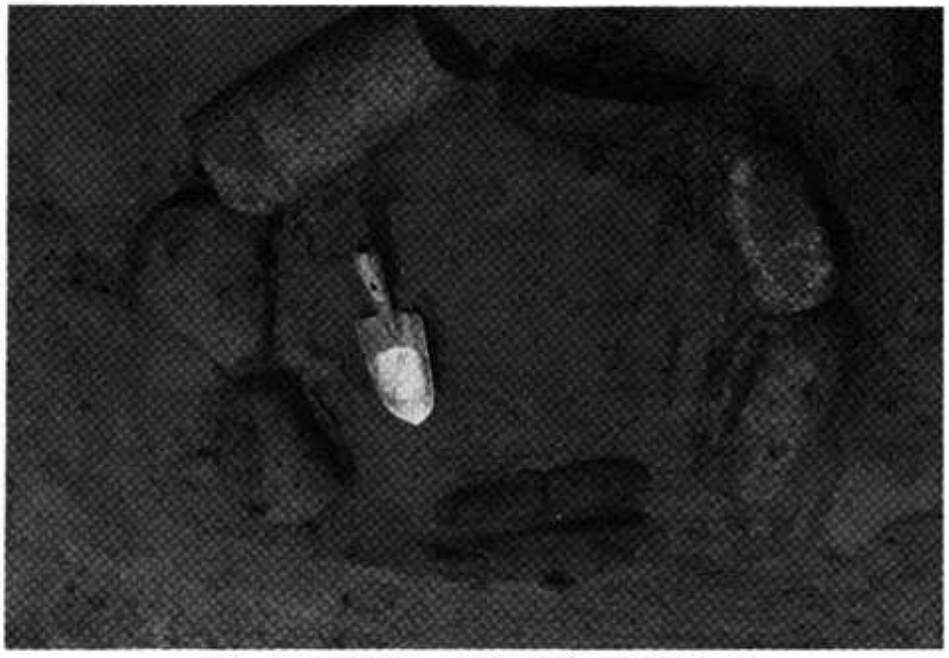


第一号住居址（第一次生活面）に於ける石囲い炉址の出土状況．中央ベルト表面が第二次生活面

第一号住居址（第一次生活面）に於ける土器出土状況



第一号住居址（第一次生活面）に於ける石囲い炉

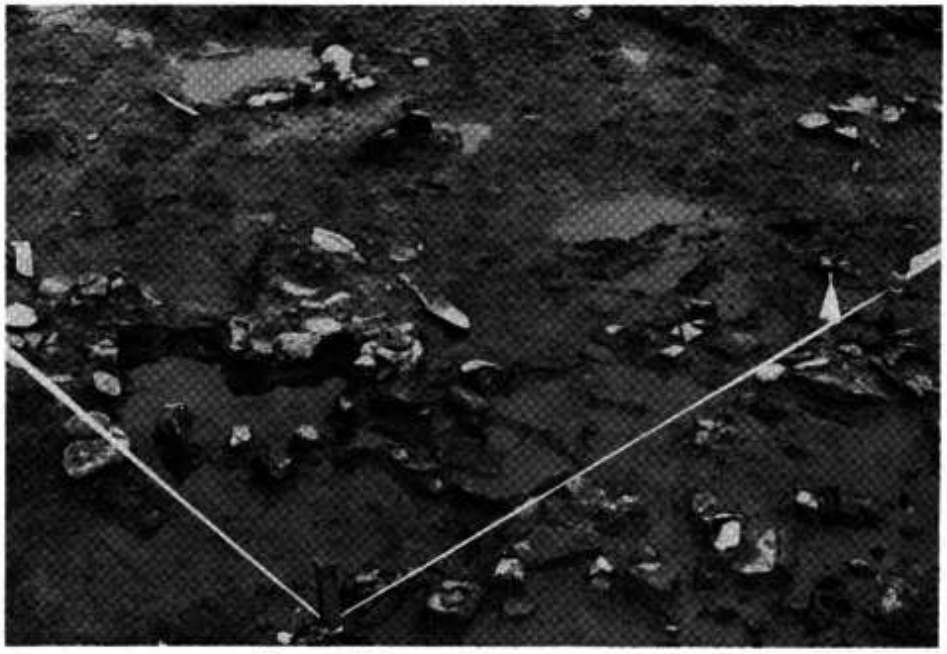


同上，中央からは焼石，手前右には石棒が利用されている

第一号住居址（第二次生活面）に於ける堰堤炉

同上．下部は第一次生活面に切り込んでいる

第二号住居址に於ける土器出土状況



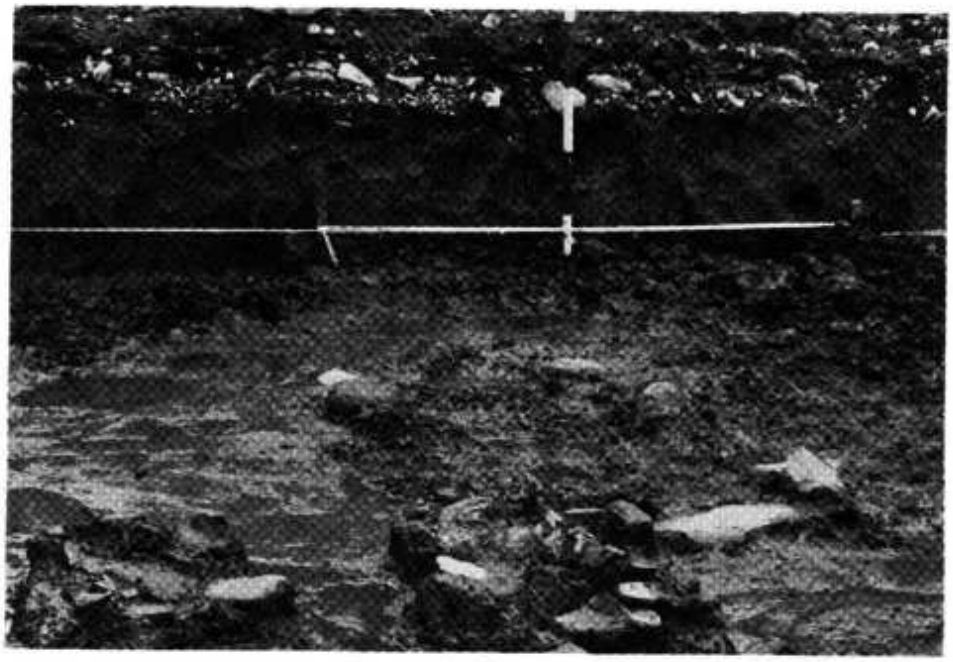
第二号住居址に於ける土器出土状況

第二号住居址に於ける土器出土状況

第二号住居址に於ける土器出土状況

石囲い土拡墓

同　　上



石囲い土拡墓と層位関係

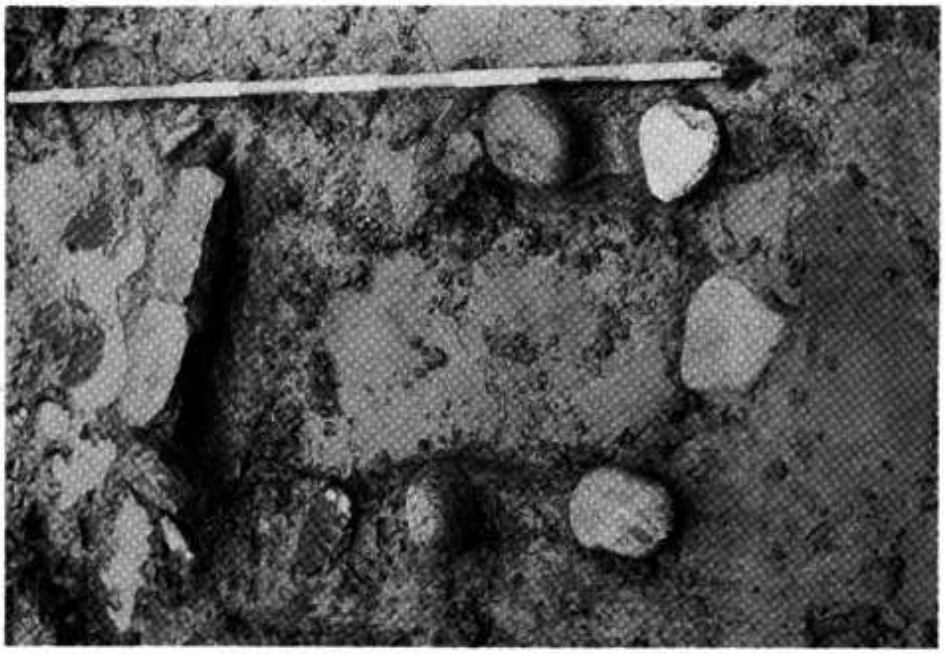
石囲い土拡墓と周辺土器出土状況

石囲い土拡墓土器埋設状況

同　　上

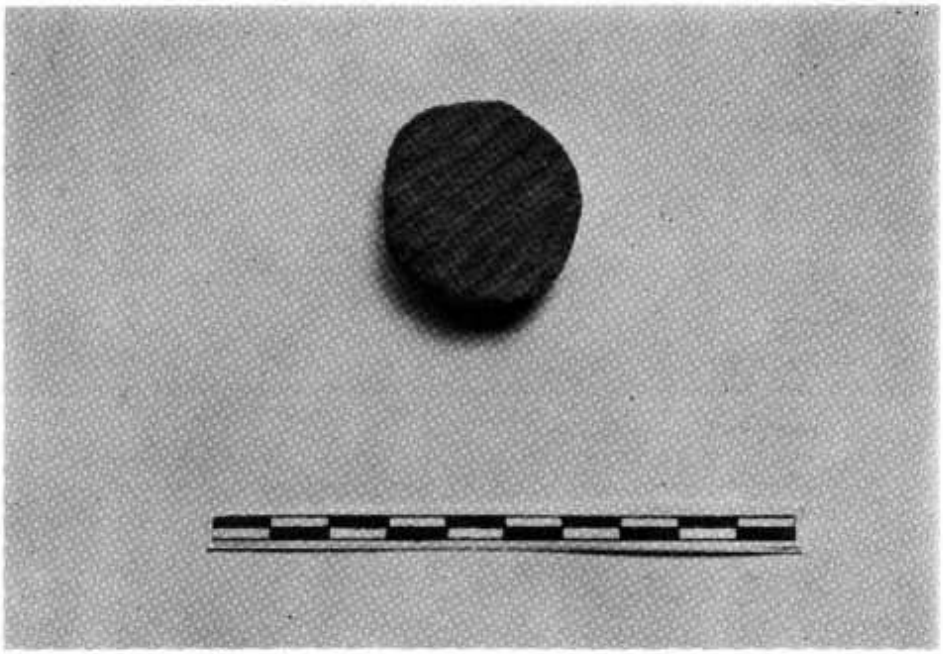
石囲い土拡墓土器埋設状況

同　　上

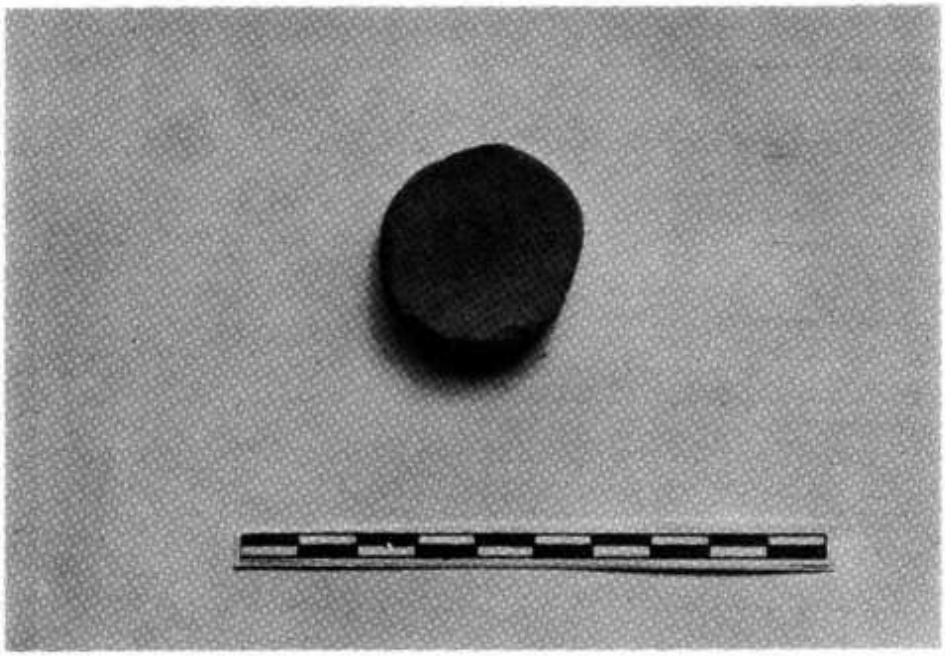


石囲い土拡墓，土器撤去後の状況

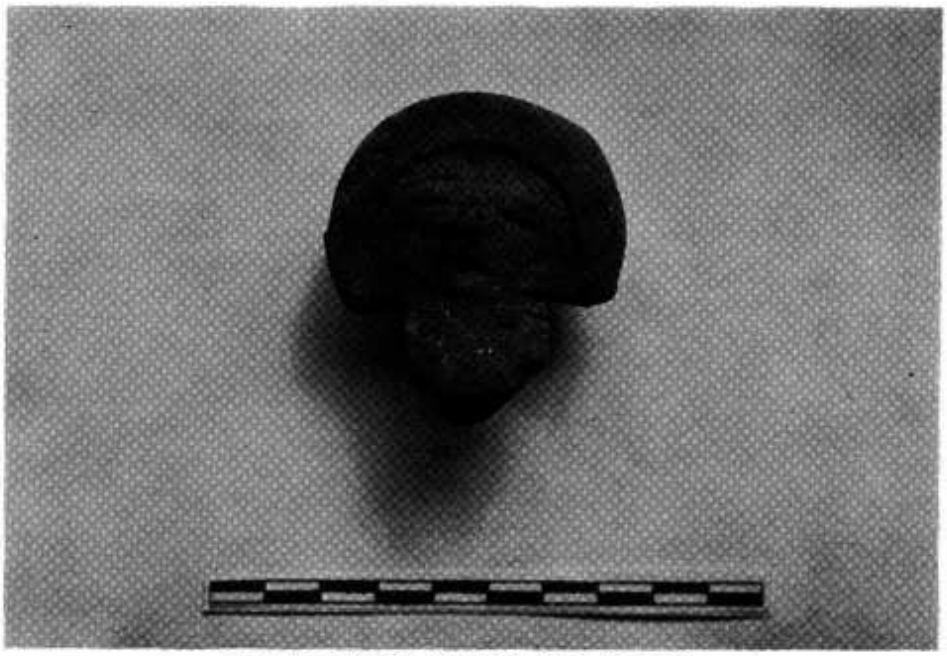
同　　上



第一号住居址（第一次生活面）出土の土製円盤（表）

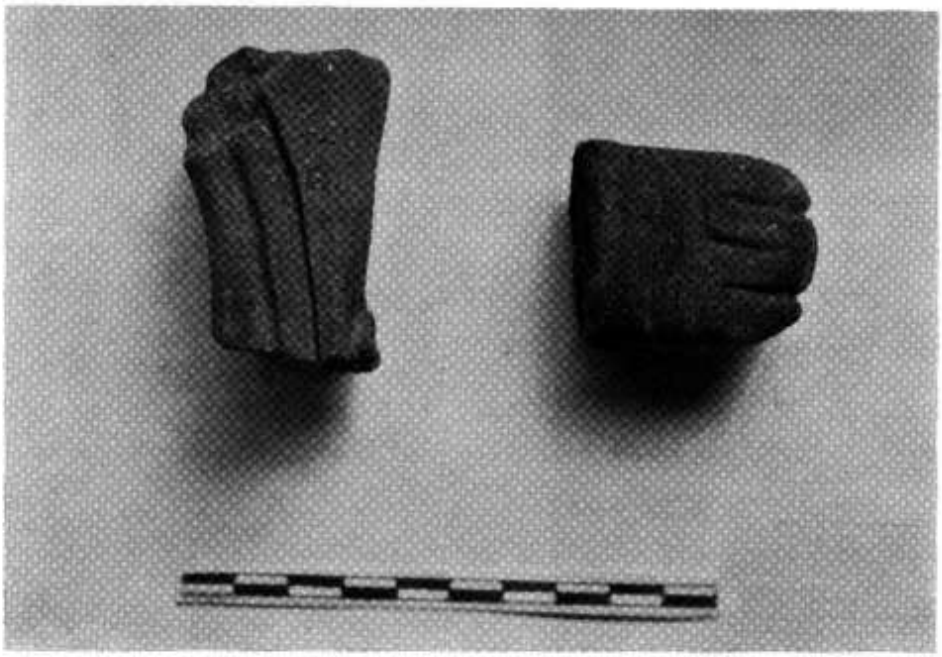


同　　上　（裏）

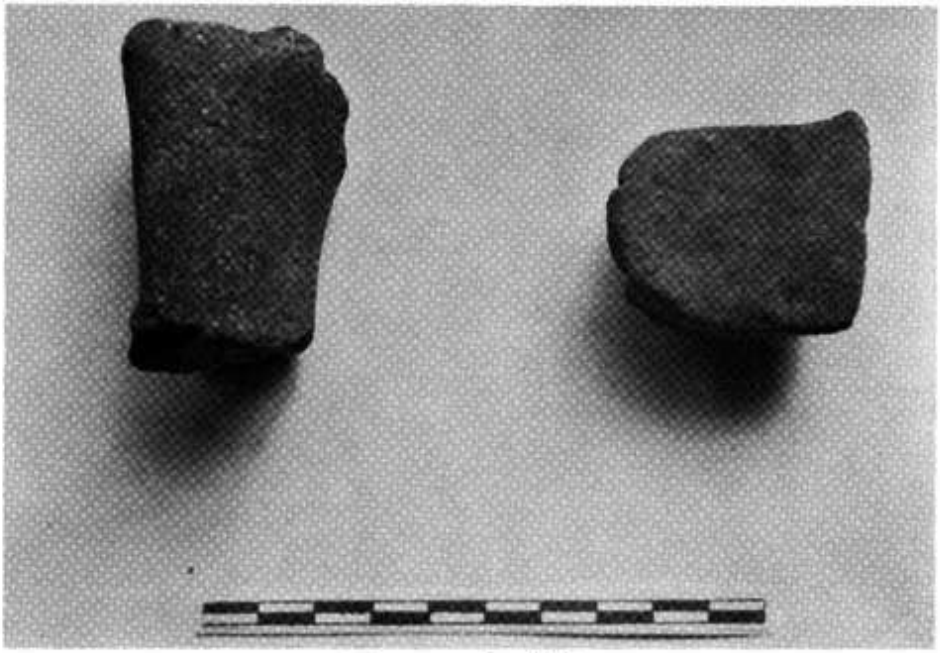


第一号住居址（第二次生活面）出土の土偶（表）

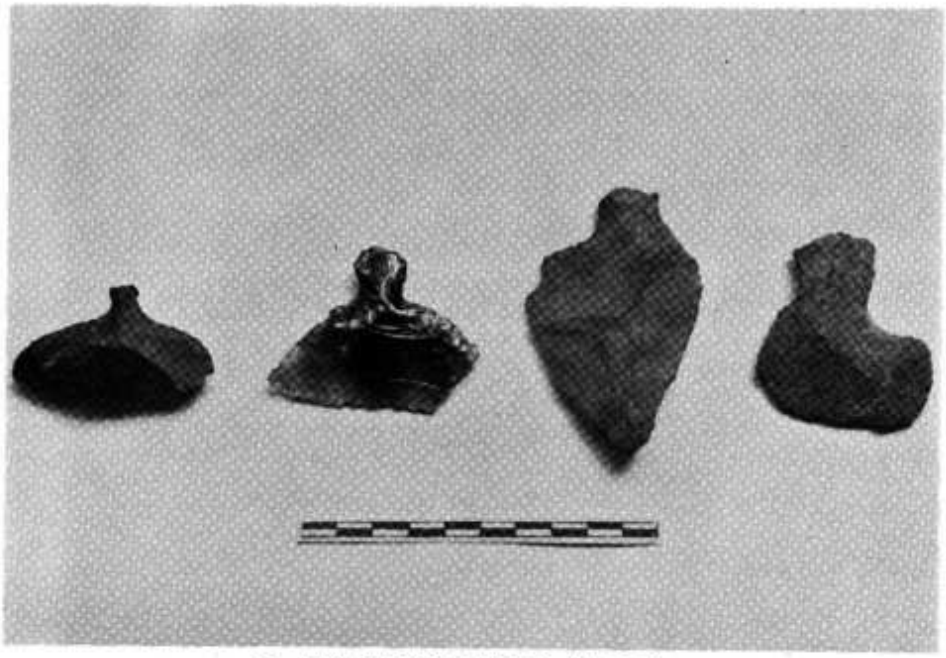
同　　上　（裏）



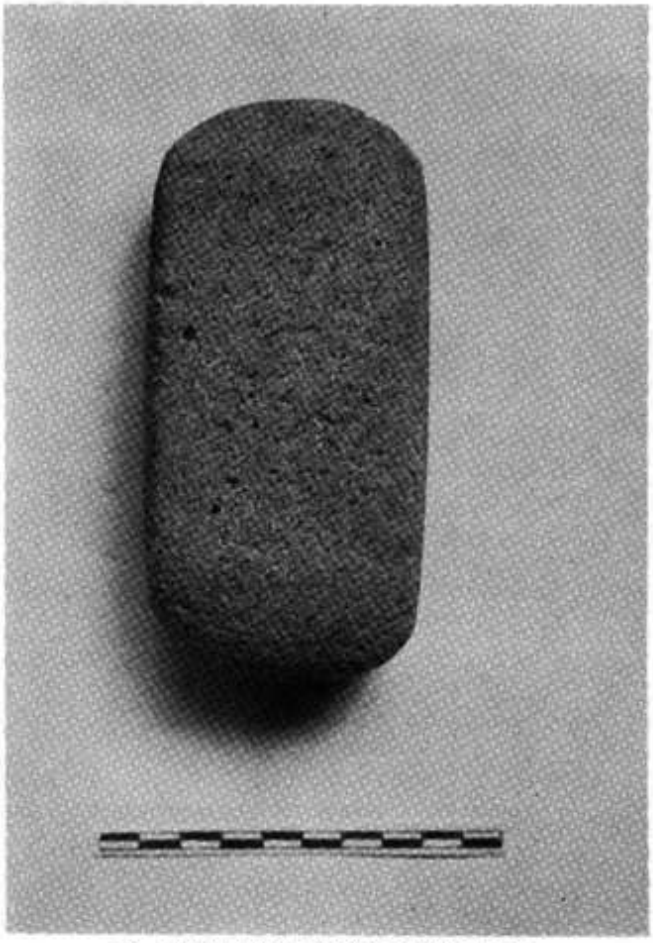
第1号住居址（第二次生活面）出土の土偶破片（足・手）



同　　上（裏）

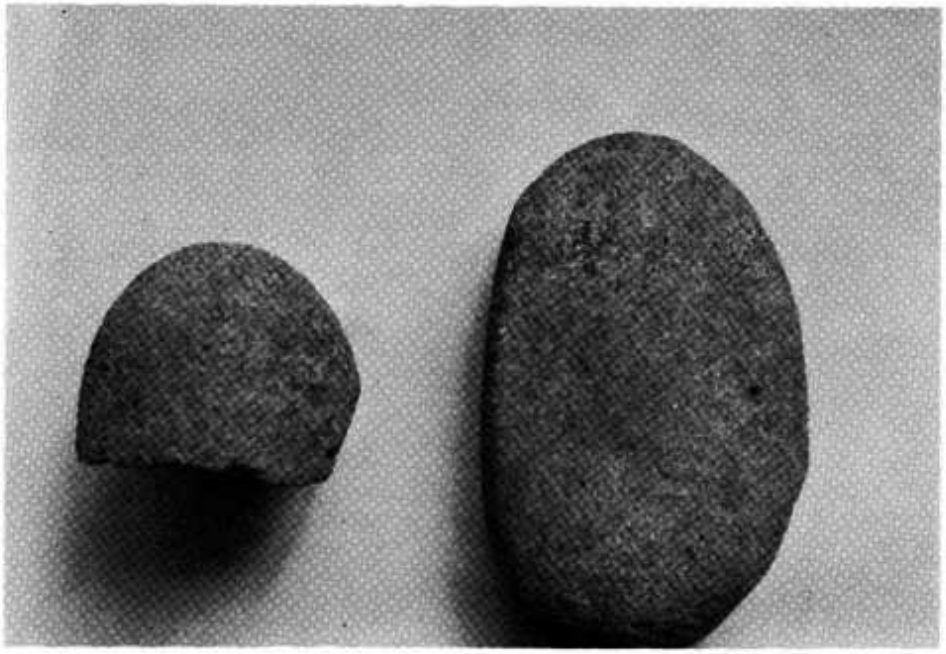


第一号住居址（第二次生活面）出土の石ヒ

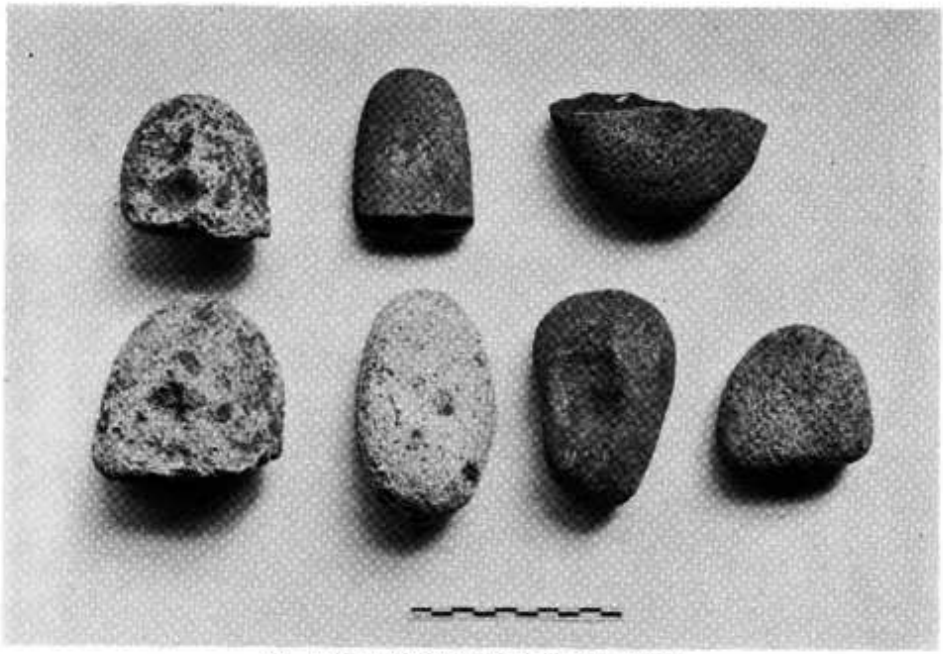


第一号住居址（第一次生活面）出土の磨石

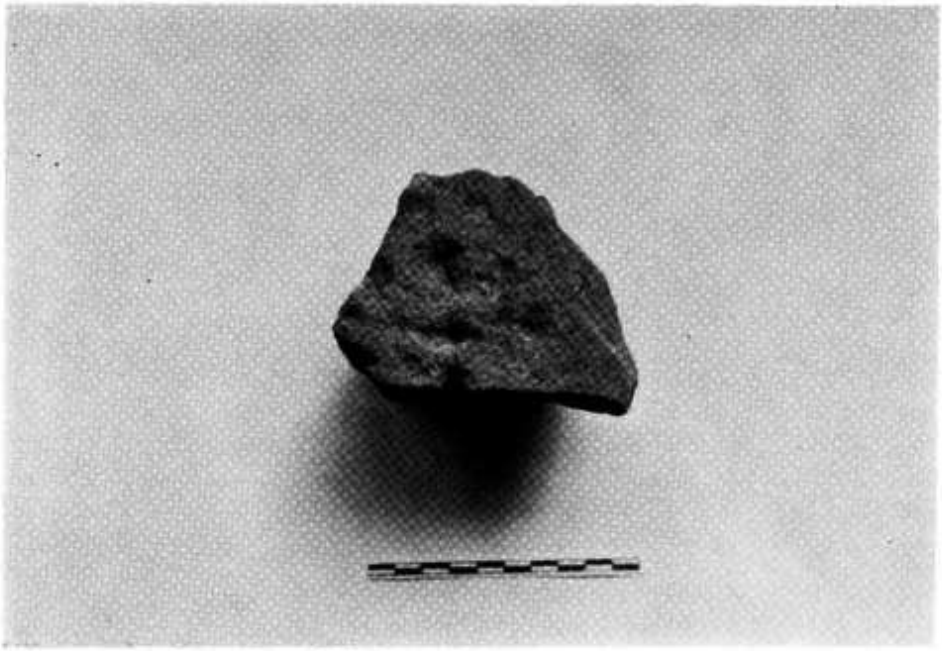
第二号住居址出土の磨石



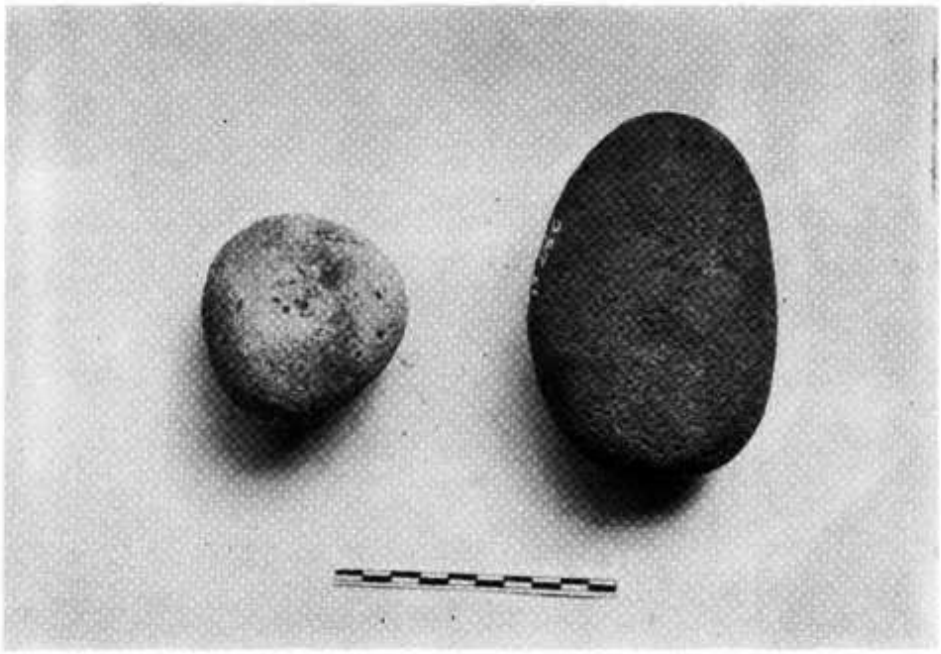
第一号住居址（第二次生活面）出土の磨石



第一号住居址（第二次生活面）出土の凹石

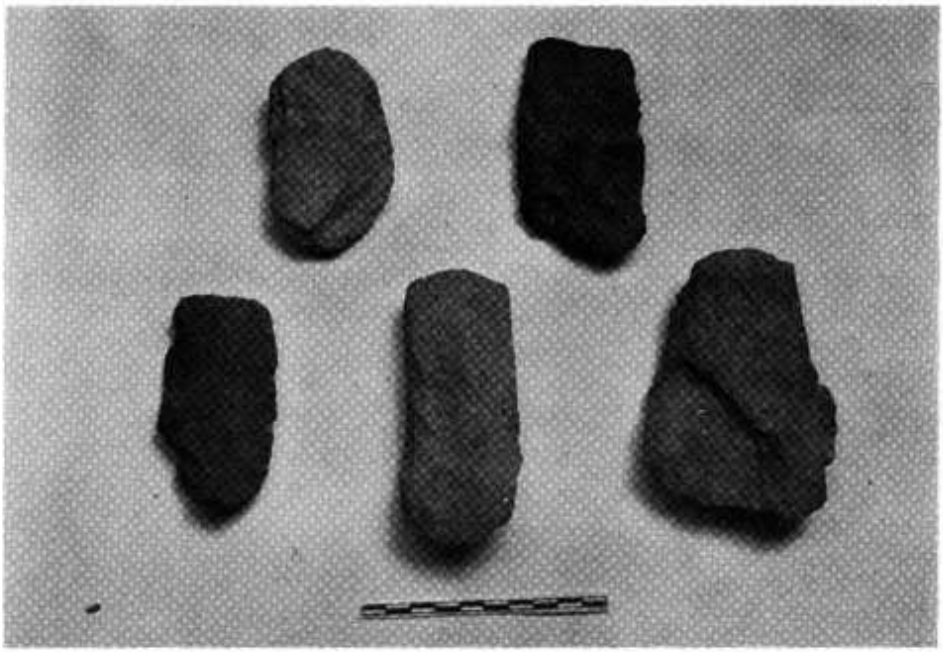


第一号住居址（第二次生活面）出土の多孔石

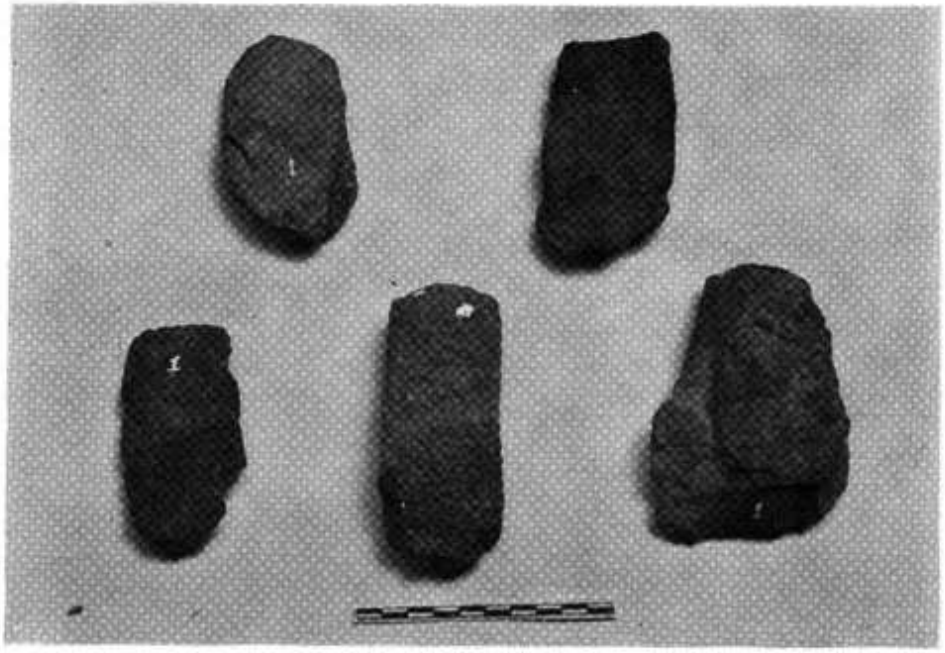


第二号住居址出土の凹石

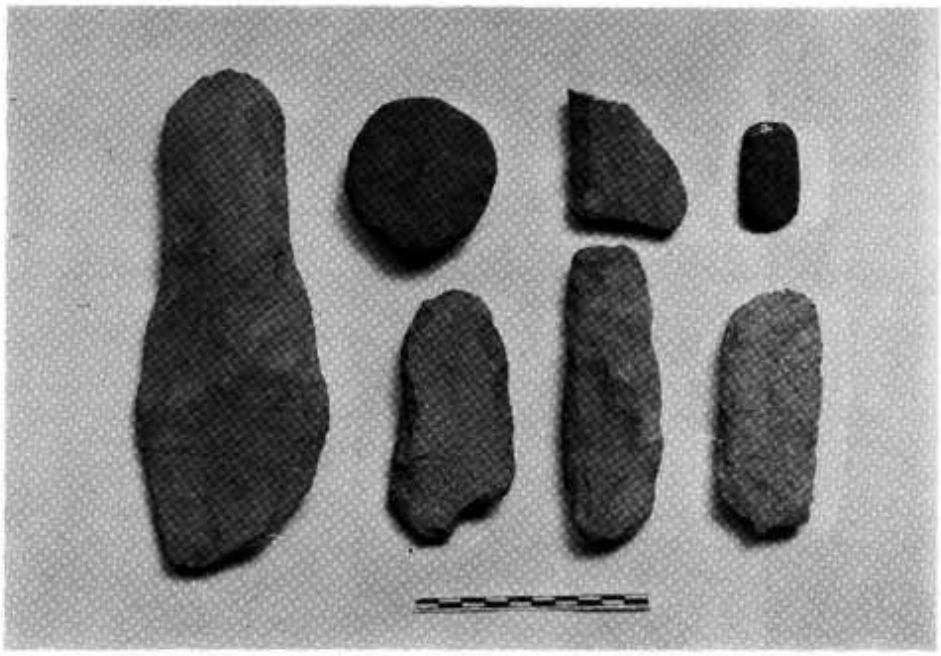
その他グリツト出土の凹石



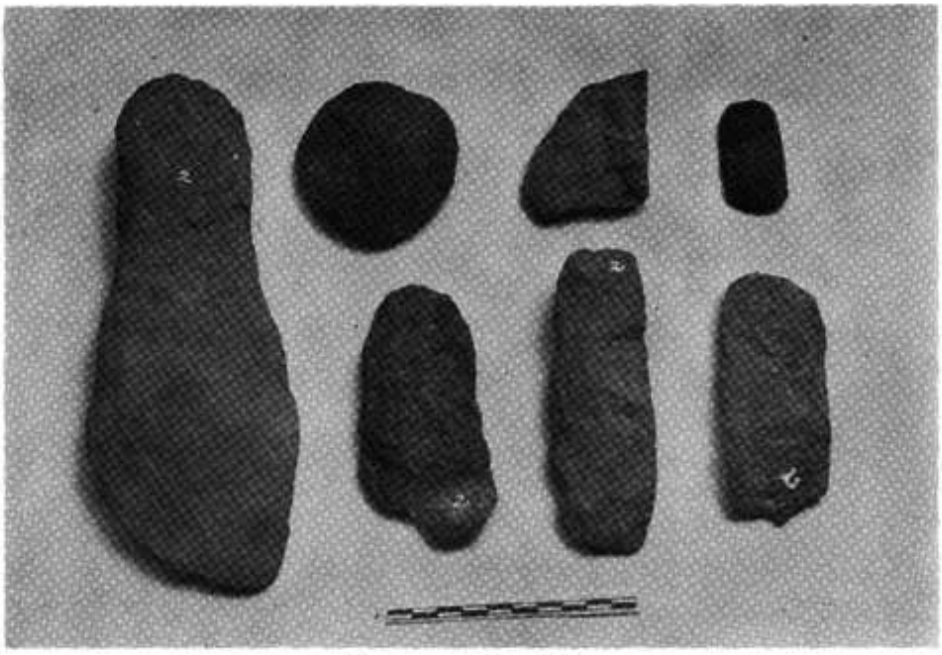
第一号住居址（第二次生活面）出土の石斧（表）



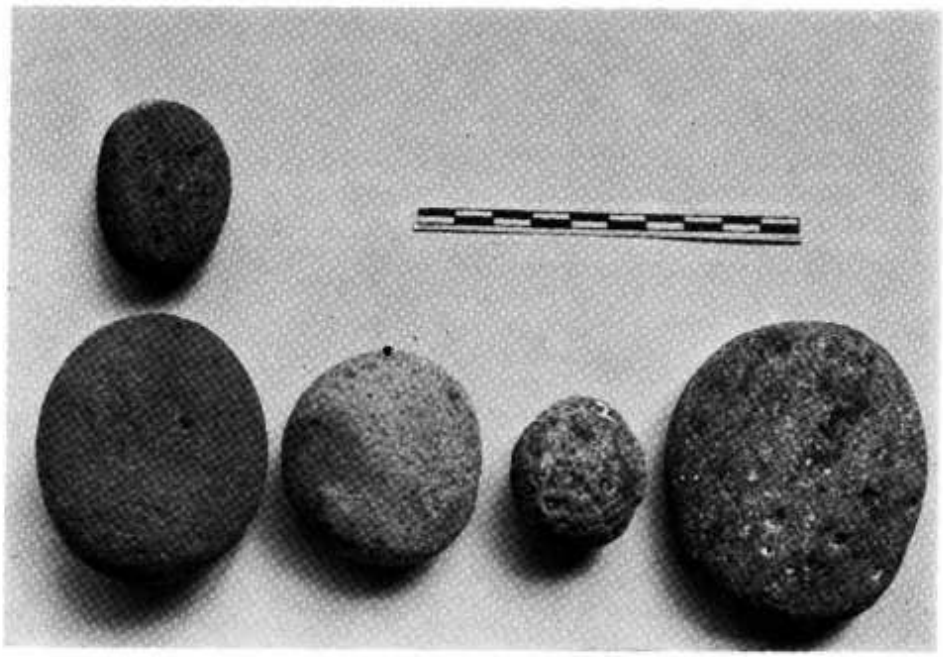
同　　上　（裏）



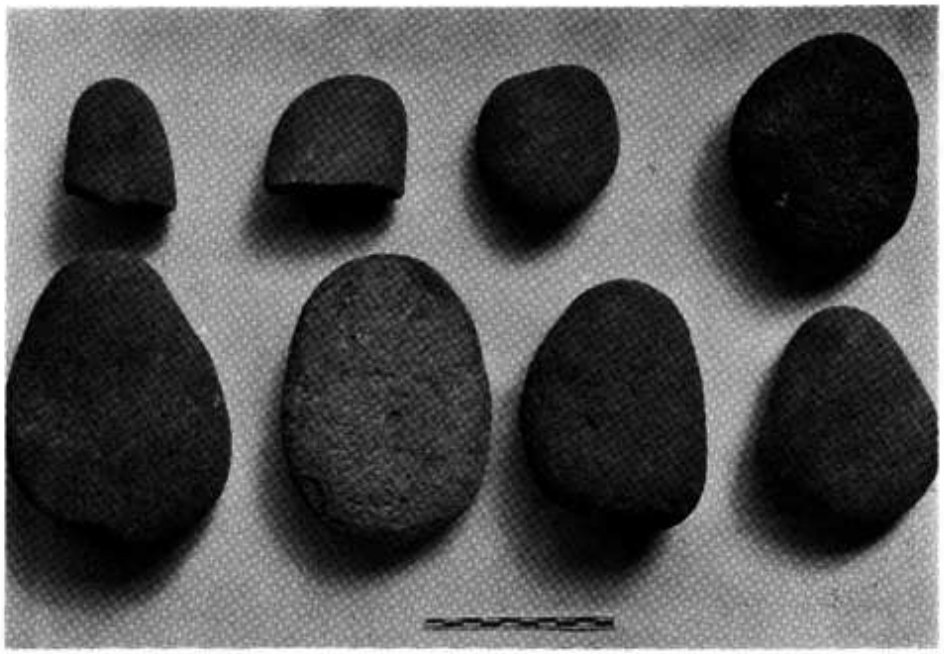
第二号住居址出土の石斧（表）



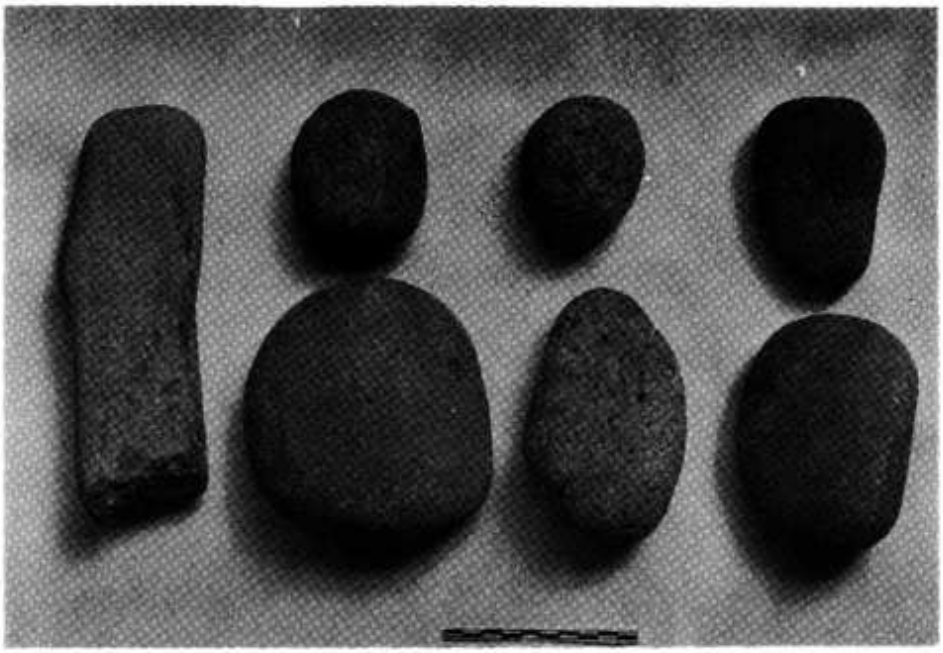
同　　上　（裏）



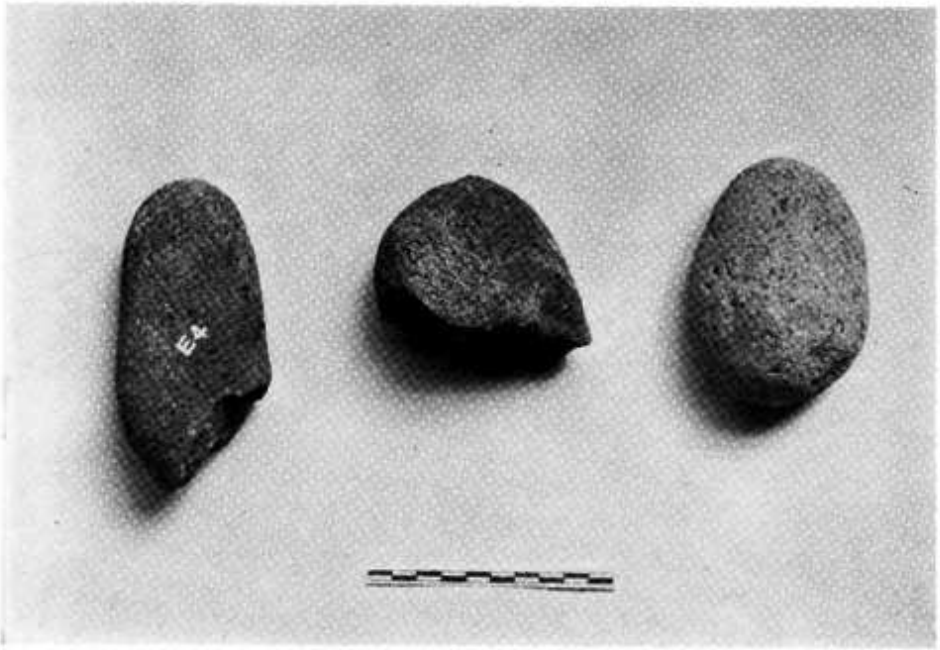
第一号住居址（第一次生活面）＜上段＞第二号住居址出土の玉石



第一号住居址（第二次生活面）出土の敲石

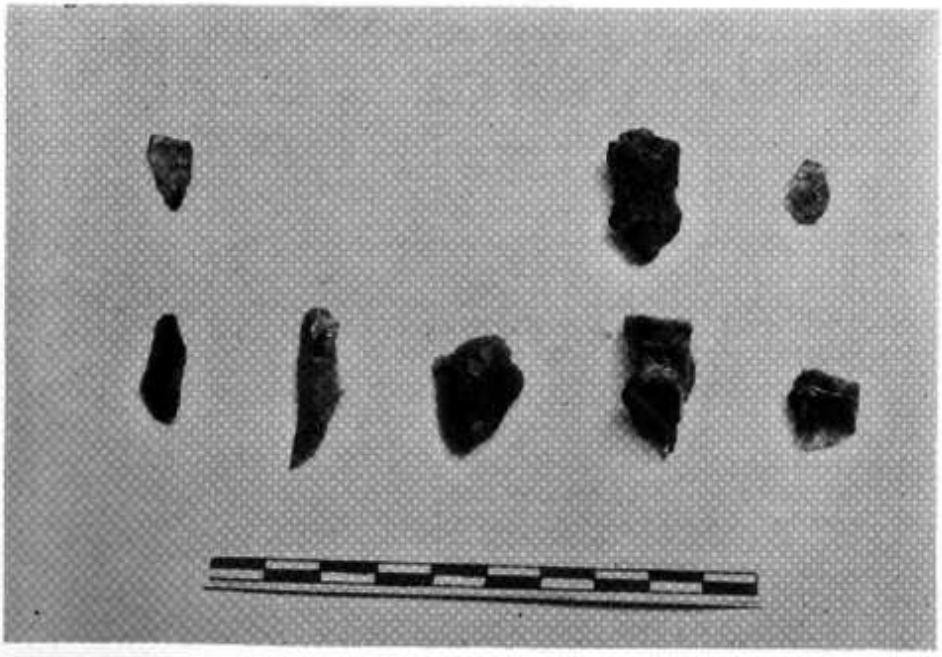


第二号住居址出土の敲石



その他グリツト出土の敲石

第一号住居址（第二次生活面）出土のメノー剥片＜上段左2つ＞とその他グリツト出土の石鏃及び黒曜石剥片



第一号住居址（第二次生活面）出土の黒曜石剥片＜上段左＞と第二号住居址出土の黒曜石剥片

上石田遺跡

甲府盆地低部の中期縄文遺跡
発掘調査報告書

印刷　昭和48年3月20日
発行　昭和48年3月31日

発行所　甲府市教育委員会

印刷所　㈱峡南堂印刷所
甲府市丸の内1丁目10―1
TEL ㈹2528